

学級づくり ガイドブック

■好ましい人間関係を育む学級をめざして■



千葉県総合教育センター

《はじめに》

4月始業式、学級担任の発表。「やったー！」と歓声を上げる子ども、にこっと微笑み軽くガッツポーズをする子ども、これから始まる新しい一年に期待を込めた表情を浮かべています。どの学校でも見られる風景ですが、先生方にとっても、これから始まる一年に向けて決意を新たにする瞬間です。

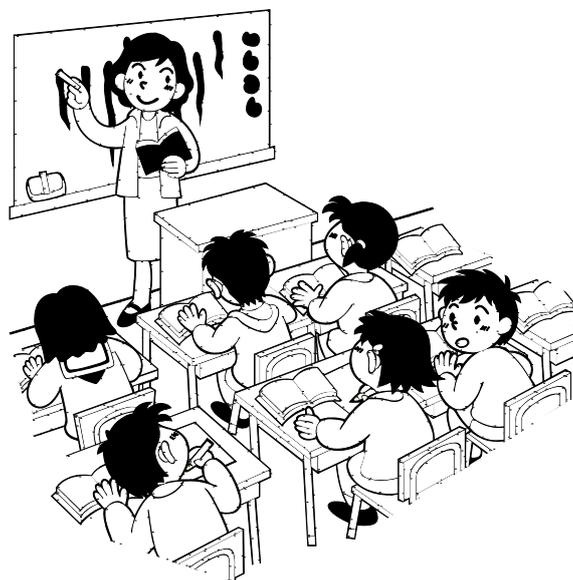
学級づくりは、これまでに多くの先生方により様々な取組がなされ、すばらしい実践が多数報告されてきました。また、学級づくりに関する教育技術を紹介する教育書も多数出版されています。学級づくりは決して新しいものではありません。むしろ誰もが当たり前のように取り組んできたものです。しかし、その実践は、理論的に体系化されたものではなく、先生方の長年の経験に基づいた、先生方の人間的魅力によりつくり出されたものが多かったように思われます。

今の時代、いじめや不登校、学級崩壊など様々な課題が教育現場では見られます。これらの多くは、学級内における人間関係がうまく構築できない結果、生じている現象と思われれます。こういう時代だからこそ、改めて学級づくり、特に人間関係の築き方について目を向けることは重要と考えます。学校生活が充実し楽しくなるのも、人間関係がうまくいくからこそ味わえるものです。学級づくりは、今まさに必要とされ、今後も大事にされなければいけない領域と考えます。

本書は、多くの若手教師のために、学級づくりの考え方や教師の姿勢を紹介するものです。本書を参考にして、子どもとの信頼関係を築いていってください。子どもは教師を信頼すれば、聞く耳を持ち、心を開きます。そこで初めて教育は成立します。そして、その信頼関係をもとに、集団としてのまとまりをつくってください。多くの子どもたちが安心して学校生活を送り、学級に居場所を感じるができるようになれば、笑顔いっぱいの楽しい学校生活が送れるものと思います。

また、多忙な生活を余儀なくされている先生方が、本書を読むことで、少しでも元気になっていただければ幸いです。よい学級づくりの源は、先生方の元気です。先生方が心も身体も元気で学校生活が楽しければ、子どもたちも元気になれます。これが学級づくりのスタートと考えます。

本書を、千葉県教育委員会作成の「豊かな人間関係づくり実践プログラム」と併用しながら、よりよい学級をつくっていただきたいと思います。



◇◆◇ も く じ ◇◆◇

I 学級づくりの理論 Q&A・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1~5

- Q1 「学級づくり」とはどのようなことですか
- Q2 どんな学級をめざすのですか
- Q3 めざす学級をつくるためになぜ、人間関係を重視するのですか
- Q4 「好ましい人間関係」とはどんなことですか
- Q5 学級の中で、どのように人間関係を育てていくのですか
- Q6 「規範意識」とはどのようなことですか
- Q7 好ましい人間関係を育む学級づくりの構想は、どのようなものになっていますか

II 学級づくりの進め方・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6~9

- 1 PDCAサイクルで学級づくりを
 - (1) Plan：計画を立てよう
 - (2) Do：実践しよう
 - (3) Check：評価する Action：改善する
- 2 学級づくりを進める上での留意点
 - (1) スモールステップで支援しよう
 - (2) 試行錯誤を認めるゆとりを持とう
 - (3) 継続しよう
 - (4) あきらめずに指導しよう
 - (5) 「教育観」をしっかり持とう

III 学級づくりの実際 人間関係を育てる・・・・・・・・・・・・・・・・10~17

- 1 個を育てる
 - (1) 信頼関係づくり
 - (2) 自己肯定感を育てる
- 2 集団を育てる
 - (1) 子ども同士が認め合う
 - (2) 授業を通して人間関係をつなぐ
 - (3) 一体感をつくる

IV 学級づくりの実際 規範意識を育てる・・・・・・・・・・・・・・・・18~21

- 1 規範意識を育てる場
 - (1) 学級開きで確認する
 - (2) 話し合いでつくり出す
 - (3) 道徳教育で考えさせる
 - (4) 授業の中で育てる
- 2 規範意識を育てるための心構え
 - (1) 率先垂範
 - (2) 愛情を注ぐ
 - (3) 時には毅然とした指導
 - (4) 凡事徹底（ぼんじてっい）

V 学級づくりの実際 同僚・保護者との関係づくり・・・・・・・・22~25

- 1 同僚の教職員とのかかわり
 - (1) 同僚とのコミュニケーション
 - (2) 同僚とのコミュニケーションにおける留意点
 - (3) チームワークづくりに求められるバランス感覚
- 2 保護者は子どもの成長と一緒に見守るパートナー
 - (1) 積極的な情報発信で学校や担任の教育に対する理解を得る
 - (2) 保護者の思いを上手に受信する
 - (3) 保護者との連携における留意点

VI 教師としての在り方・・・・・・・・・・・・・・・・26~29

- 1 自分をコントロールする力を身に付けよう
 - (1) 忙しい教師の仕事
 - (2) 「時間のゆとり」と「心のゆとり」
 - (3) 「多忙感」から「満足感」へ
- 2 教師の資質能力と学級づくり
 - (1) 教師の3つの資質能力
 - (2) 学び続ける教師をめざして
 - (3) 学級づくりを進めるための自己評価表

「学級づくりに必要な教師の資質能力」チェック表・・・・・・・・30

参考文献・・・・・・・・・・・・・・・・31

I 学級づくりの理論 Q & A

Q 1 「学級づくり」とはどのようなことですか

A : 本書では、「学級づくり」を「めざす学級の姿を明らかにし、教師と子どもの信頼関係や子ども同士の好ましい人間関係を築くことを通して、学級を一つにまとめていく取組」ととらえています。

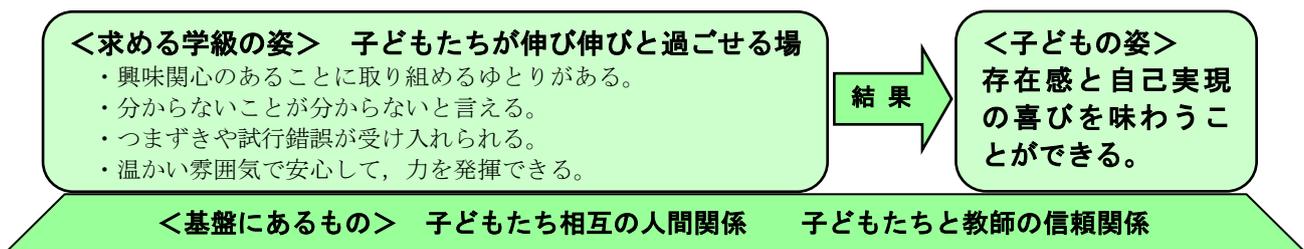
学級は、学習指導や生徒指導を行う際の基盤となる集合体で、この学級が安定することで、学習指導や生徒指導に十分な教育的効果が期待されると考えられます。そして、この安定した学級を支えるものが「子どもたちと教師の信頼関係」「子どもたち相互の人間関係」であると考えます。

Q 2 どんな学級をめざすのですか

A : 本書でめざす学級の姿は、「規範意識と好ましい人間関係により、お互いに尊重し合う学級」ととらえます。

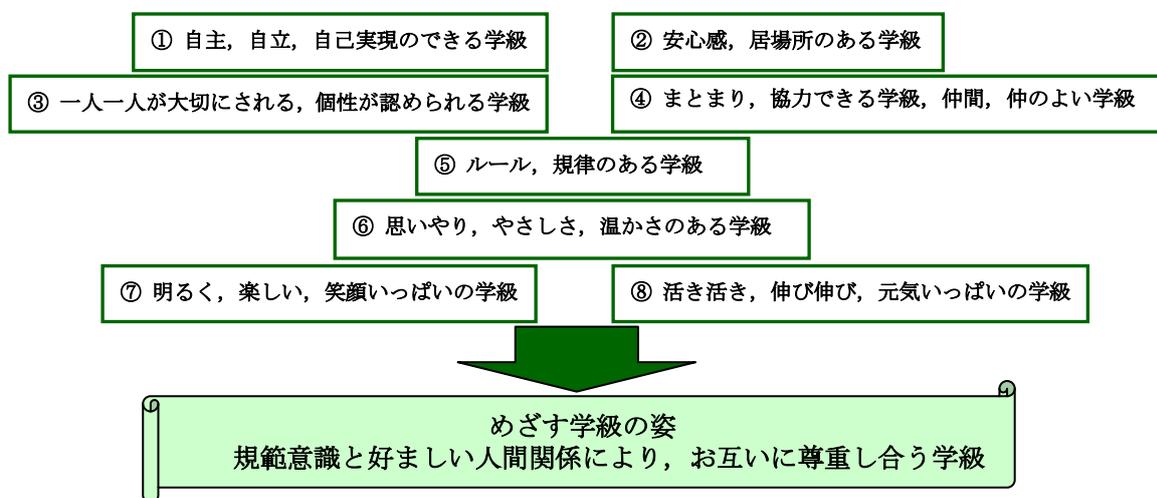
本書でめざす学級の姿は、国が求めるものと千葉県の教師がめざすもの両面から導き出しました。なお、千葉県がめざす学級の姿は、5年経験者研修生を対象にしたアンケート調査の結果を参考としています。

国がめざす学級の姿は「教育課程審議会の答申（H10. 2）」を参考としています。答申で述べられている学級の姿をまとめると、次のような図になります。



また、千葉県の教師がめざす学級の姿を、小・中・高等・特別支援学校5年経験者研修生 429名の「アンケート調査（H24. 6 実施）」から考えました。アンケートの結果、めざす学級の姿を8つのキーワードにまとめ、次のように分類整理しました。

資料1 5年経験者研修生が求める学級の姿を表すキーワード



「①自主，自立，自己実現」は，学校教育全般を通して育てる子どもの姿・行動です。その実現のために学級は「②安心感，居場所」が必要であると考えます。

では，どのような学級であれば子どもは安心感・居場所を感じられるのでしょうか。それが「③一人一人が大切にされる，個性が認められる学級」であり「④まとめ，協力できる学級，仲間，仲のよい学級」であるととらえます。そこには「⑤ルール，規律」が必要であり，この3つを相互に関連づけながら，好ましい人間関係は築かれていくものと考えます。

このような学級には，互いに「⑥思いやり，やさしさ，温かさ」の雰囲気があり，その結果，「⑦明るく，楽しい，笑顔いっぱい学級」や「⑧活き活き，伸び伸び，元気いっぱいの学級」のような，具体的な子どもの姿として表れるものと考えます。

このように，国と千葉県の教師のめざすものから，本書では「規範意識と好ましい人間関係により，お互いに尊重し合う学級」を，めざす学級の姿ととらえました。

Q3 めざす学級をつくるためになぜ，人間関係を重視するのですか

A：社会状況の変化及び文部科学省「学校教育に関する調査」により，好ましい人間関係を重視した学級づくりが重要であると考えます。

(1) 社会状況の変化による影響

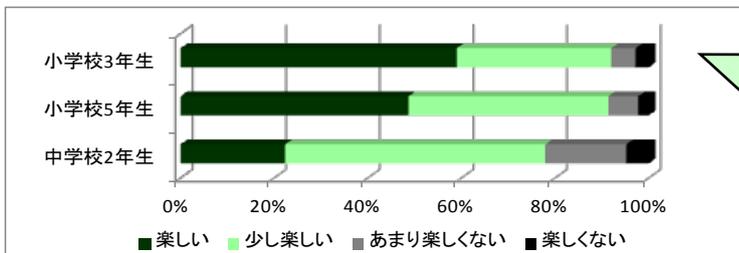
少子化，核家族化など，社会の変化により，人間関係が希薄になっています。子どもたちは人とかかわる機会や体験が不足しており，学級の中で良好な人間関係を築くことが難しい状況が見られます。

そのため，いじめや不登校，学級崩壊など，今日的教育課題が生じていると考えられます。

以前の子どもたちは，家庭や地域の中に，人とかかわる環境とゆとりがありました。しかし，今の子どもたちはそういう機会が少ないので，人とどうかかわってよいかわからないまま学校生活を送っています。

ゆえに，学校で人間関係の築き方を教える必要があると考えます。

(2) 学校教育に関する意識調査 (平成15年9月 文部科学省)



グラフ：【学校生活への満足感】

楽しいこと理由

- ・小3…友だちと遊ぶのが楽しい 92.8% (1位)
- ・小5…友だちと遊ぶのが楽しい 94.5% (1位)
- ・中2…友だちとの遊びや交流 94.1% (1位)

不満なこと理由

- ・小3…友だちとのこと 52.1% (1位)
- ・小5…友だちとのこと 46.1% (2位)
- ・中2…友だちとの遊びや交流 94.1% (1位)

学校生活で身に付けたいこと(身に付けさせたいこと)

- ・小3…友だちをつくったり，自分の周りの人々と仲良く付き合ったりする力 68.2% (2位)
- ・小5…友だちをつくったり，自分の周りの人々と仲良く付き合ったりする力 69.8% (2位)
- ・中2…友だちをつくったり，自分の周りの人々と仲良く付き合ったりする力など社会の一員として必要な能力 72.0% (1位)
- ・保護者…友だちをつくったり，自分の周りの人々と仲良く付き合ったりする力など社会の一員として必要な広い能力 84.2% (1位)
- ・教員…友だちをつくったり，自分の周りの人々と仲良く付き合ったりする力など社会の一員として必要な幅広い能力 84.4% (1位)

上記のグラフを見ると，多くの子どもたちは「学校が楽しい」と回答しています。その理由は「友だちと遊ぶのが楽しい」が上位を占めています。逆に「学校が不満(楽しくない)」な理由は「友だちとのこと」がやはり上位を占めています。つまり，友だちとの人間関係が良好であれば「学校は楽しい」場となり，気まずいと「学校は楽しくなくなる」ということができます。

また，「学校教育で身に付けたいこと」について，子どもだけでなく教師，保護者も「友だちをつくったり自分の周りの人と仲良く付き合ったりしていける力」を求めています。勉強がわかることも大事ですが，それと同じくらい良好な人間関係を築いていく力を求めていることがわかります。

このような理由から，学級づくりでは，好ましい人間関係を築くことが重要であると考えました。

Q4 「好ましい人間関係」とは、どんなことですか

A：「好ましい人間関係」とは「お互いに尊重し合う」ことを基本にした人間関係です。「尊重する」とは、自分との違いを認めた上で、相手を受け入れ、そして理解する、つまり、自分と違った考えを持っている相手でも、人間として相手を受け入れることです。このことにより子どもは、安心感を味わい、自分を素直に表現することができるようになりますと考えます。

本書では「お互いに尊重し合う」ことを学級づくりの基本とし、一人一人の子どもを育てそれを集団としてまとめていく手法について明らかにすることをねらいとしています。

Q5 学級の中で、どのように人間関係を育てていくのですか

A：まず、**個**を育てます。個を育てるとは、子ども一人一人に「自己肯定感」を育てることです。「自己肯定感」とは「自分を大切にと思い、自分が好きだと感じる」感覚です。

次に、育てた個、一人一人が手をつなぎ、**学級としてのまとまりをつくり**ます。学級を一つの目的に向かって協力し、力を発揮する「チーム」としての集団へと高めていくことです。

子ども一人一人に「自己肯定感」を育てるためには、「僕はみんなに受け入れてもらっている」という「**受容感**」と「僕はここに居ていい」という「**集団への所属感**」を味わわせることが必要です。その上で、その子の活動を教師が認め、友だちが認めることを通して「僕はクラスのために役立っている」という「**自己有用感**」と「僕もやればできる」という「**自己効力感**」を感じることができます。

このように「受け入れられる、認められる」ことを繰り返し経験させ、これらの感情をスパイラルに味わわせながら「自己肯定感」を育てていきます。

その際、教師の「あなたのことが大事、あなたのことを見ているよ」という尊重する姿勢が重要で、この姿が子どもたちを感化し、好ましい人間関係を学級全体に波及させていくものと考えます。



集団を育てる
学級集団としての肯定感の育成



個を育てる 自己肯定感の育成

みんなから認められ、自己肯定感を持った子どもは、友だちを認めることができるようになります。つまり、お互いを認め、尊重し合うという好ましい人間関係により、学級という集団を育て、最終的に「このクラスでよかった、このクラスが好きだ」という「**学級集団としての肯定感**」を育てることが重要だと考えます。

教室の中では、友だちとかかわることができずに孤立している子どもや、気の合う者だけが集まり、それ以外は受け入れない閉鎖的な小集団が見られます。その小集団も、いつ疎外されるかわからない不安と緊張の中で維持されています。このような学級を一つの目的に向かって協力し、力を発揮する「チーム」としての集団へと高めていく必要があります。そこには、互いに信頼し尊重し合う意識が働き、チームとしての強いきずなが生まれます。

このように学級の中で「一体感」を感じられるように、意図的・計画的に人間関係を育てていく必要があります。

Q6 「規範意識」とはどういうことですか

A：「規範」とは、「きまり、ルール」や「マナー、礼儀」、そして「モラル」や「法律」等、を総称したものととらえます。規範意識を育てる上で大事なことは、学校の規則や学級で決めたルールをただ守らせるのではなく、子どもの心の中に規範に対する関心や自覚が芽生えるように教師が働きかけ、規範を尊重しようとする姿勢や規範を進んで守ろうとする意識を育てることです。

社会に出た時に許されない行為、例えば「人を傷つける」ことは、子どもだからと言って許されるものではありません。これは「悪いこと、してはいけないことである」と、きちんと教えなければいけないきまりです。

また、互いに気持ちよく生活できるように、互いに尊重し合うルールを考えることも必要です。「気持ちのよい挨拶をする」「人の話は最後まで聞く」等、互いを尊重し合うことを通してつくり出されるきまりもあります。

これらのきまりを、大人である教師が手本を示しながら、きちんと教え、進んで守ろうとする意識を育てる必要があります。

Q7 好ましい人間関係を育む学級づくりの構想は、どのようなものになっていますか

A：5年経験者研修生を対象に、学級づくりを進める上で「力を入れていること」「困難を感じていること」「大切にしていること」「今後、学びたいこと」「悩んでいること」についてアンケート調査を実施しました。この調査を基に好ましい人間関係を育む学級づくりの構想を図で表しました。

●アンケート調査の結果（小・中・高等・特別支援学校5年経験者研修生：429名）

<力を入れていること>

- ◇教師の多くは学級内の人間関係づくりに力を入れている。
- ◇学級の秩序やルールを築くことに力を入れている教師も多い。
 - ・教師と子どもの信頼関係を築くこと(75.3%)、子ども同士のよりよい人間関係を築くこと(52.0%)が上位を占める。学級づくりには、人間関係づくりが重要と考えている教師が多い。
 - ・秩序やルールに力を入れている教師は51.7%いる。人間関係づくりと共に学級の秩序づくりも学級づくりには大事な要因と考えている。

<困難を感じていること>

- ◇児童生徒のよりよい人間関係づくりに困難を感じている教師が多い。
 - ・人間関係づくりに力を入れているが、84.7%の教師が困難と感じている。

<大切にしていること>

- ◇児童生徒一人一人を大切にしたり、認めたりすることを重視している。また、子どもの気持ちや一緒に過ごす時間を大事にしている教師が多い。
 - ・普段から子どもと過ごす時間を大切にし、児童生徒理解に努めていると推測される。

<今後、学びたいこと>

- ◇児童理解力、生徒指導実践力を高めたいと考えている。
- ◇規律づくりや秩序ある学級づくりを望んでいる。
 - ・学級内には、問題行動をとる子や不登校児童生徒等、多様な子どもが存在する。子ども一人一人に応じる手立てを求めている、と考えられる。
 - ・また、子どもの心を理解し、信頼関係を築く手法について学びたい、と考えている。
 - ・ルールの決め方やそれを徹底させる手法について知りたい、と考えている。

<悩んでいること>

- ◇保護者への対応に苦慮している。
- ◇教師同士の人間関係の築き方に困難さを感じている教師もいる。
- ◇時間がない、余裕がない、多忙であると感じている教師は少なくない。

これらのアンケートの結果から、「教師と児童生徒の信頼関係，児童生徒相互の好ましい人間関係を育てること」や「児童生徒理解に努め，生徒指導を充実させること」に力を入れて学級づくりを行おうとしていることがわかります。しかし，学級の中には様々な子どもたちがいて，その対応に苦慮していることから，人間関係づくりの難しさを感じていることがわかります。

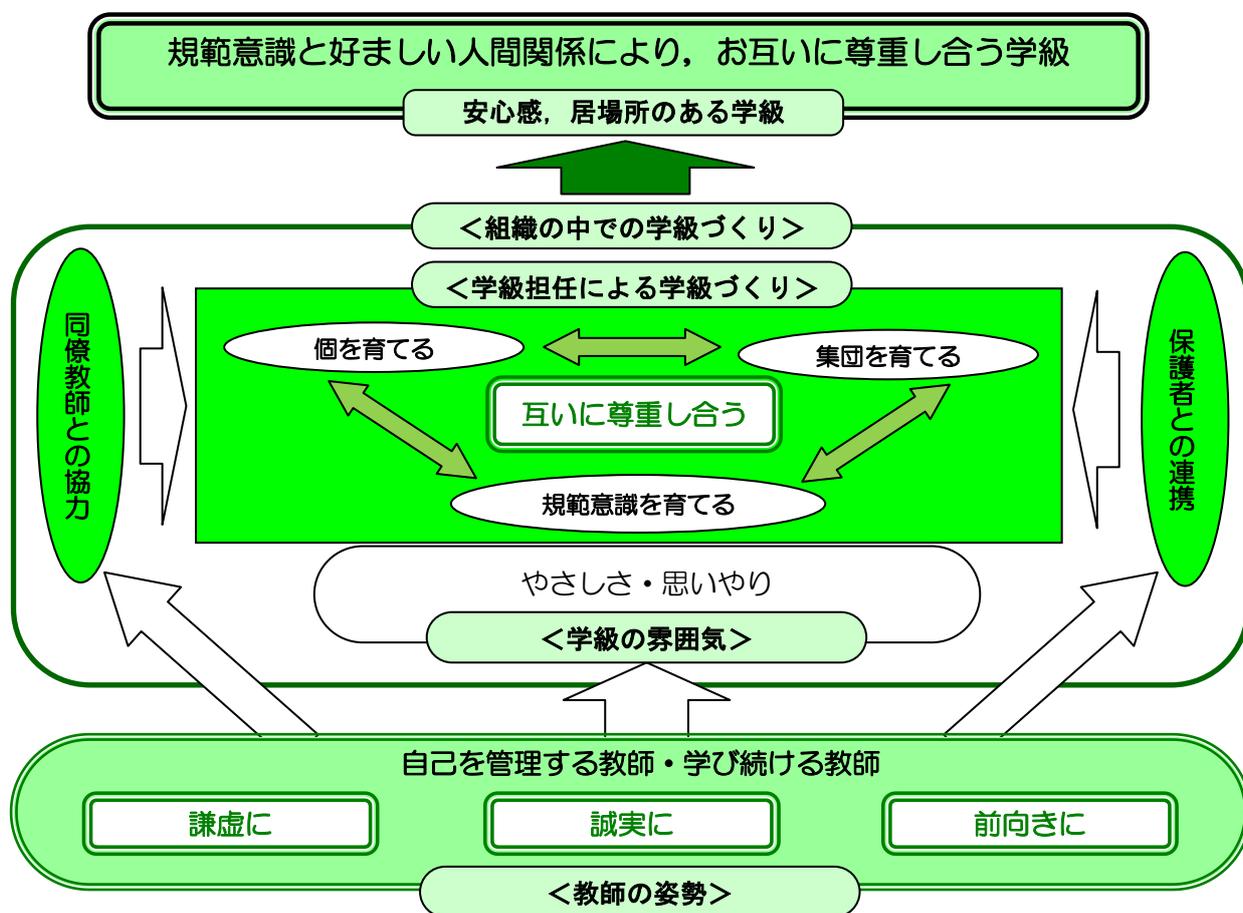
したがって，多くの教師は，好ましい人間関係を円滑に築く手法を学びたがっていると考えられます。

また，規律ある学級づくりの手法を学びたいとも考えています。その他，保護者や教師同士の協力・連携の難しさに悩んでおり，多忙感を感じていることがうかがえます。

●好ましい人間関係を育む学級づくりの構想

これらの5年経験者研修生の実態から，好ましい人間関係を育む学級づくりの構想を以下のような図で表しました。

【めざす学級の姿】



本ガイドブックでは，めざす学級をつくるために，互いに尊重し合うことを基本とし，個を育てる，集団を育てる，規範意識を育てることについて，それぞれの考え方や手法を明らかにしていきます。

また，学級づくりを間接的に支えるものとして，同僚教師や保護者との連携・協力が重要と考え，その良好な関係の築き方についても述べていきます。

さらに，学級づくりを進めるために必要な教師の姿勢（自己を管理すること，学び続けること）についても述べていきます。

その際，3つの教師の資質能力（教育の専門家としての確かな力量・教職に対する強い情熱・総合的な人間力）と関連させながら，求められる教師の在り方を考えていきます。

II 学級づくりの進め方

1 PDCAサイクルで学級づくりを

ここでは、PDCAサイクルで具体的に学級づくりを進めるクラスマネジメントの方法について述べていきます。

(1) Plan：計画を立てよう

●めざす学級の姿を明らかにする

学級づくりを進めるために、まず、めざす学級の姿を明らかにします。つまり、ゴールを決めることです。

学級担任として「どんな学級をつくりたいか。」「どんな子どもを育てたいか。」等は、はっきりとイメージしましょう。

その際、学校教育目標や校長の学校経営方針に基づき、学級目標として具現化していくことが大切です。

●子ども、学級の実態を知る

めざすゴールが設定できたら、子どもと学級の実態を把握します。つまり、スタート位置を確認します。方法としては、主観的な見取りと客観的な見取りがあります。

主観的な見取りは子どもと共に活動する中で、教師自身が子どもの現状を知ることです。できるだけ子どもと過ごし、日常的にふれあう時間を大切にしましょう。

客観的な見取りは、様々な調査や検査の利用が考えられます。その他にも、他の教師の視点で情報を入れたり、家庭との連携を図ったりすることが考えられます。

この2つの方法を併用しながら多面的に子どもや学級の実態を把握していくことが大切です。

●「戦略」を立てる

学級づくりは意図的・計画的に進めていくものです。そのためには「戦略」を持つことが大切です。現状を理想に近づけるためにはどうすればよいかを考える、その指導の手立てが「戦略」です。

「一人一人を大切に作る学級」というめざすゴールを決めたら、その思いを実現するために、様々な「戦略」を考えましょう。

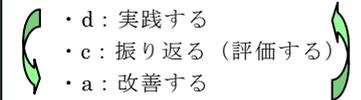
【クラスマネジメントの進め方】

P：計画する (Plan)

- ・めざす学級の姿 (ゴール) を決める。
- ・学級の実態 (スタート位置) を把握する。
- ・戦略を立てる。

D：実践する (Do)

*d→c→aを一連の活動として繰り返す。



C：評価する (Check)

- ・学期末・年度末等に振り返る。

A：改善する (Action)

- ・次年度に向けて新たな目標・戦略を立てる。

休み時間に一緒に遊んだり、給食と一緒に食べたりするなど、子どもとふれ合う時間をたくさんとりましょう。子どもの傍にいとたくさんのことが見えるようになってきます。このことが、子どもを見る目を鍛えることとなります。



コラム

自分の「教育観」をしっかり持って計画や戦略を立てましょう。

めざす学級の姿を確立し、その実現に向けた「戦略」を立てる際に大切なことは、自分の「教育観」(「指導観」「子ども観」を含む、教育に対する見方・考え方)を持つことです。

この「教育観」がしっかりしていると、判断基準が明確になり、ぶれることなく指導することができます。逆に「教育観」がはっきりしていないと指導に自信がなくなったり、ゴールを見失ったりします。若い先生方は、この「教育観」を意識して指導にあたりましょう。そして、常に自分の実践を振り返ったり、先輩教師や教育書から学んだりしながら、この「教育観」を膨らませていってください。

つまり、教師という生涯の仕事を通して自分の「教育観」を確立していくわけです。だからこそ「これで十分」ということはなく、常に学び続ける姿勢が必要なのです。

(2) Do : 実践しよう (do→check→action を一連の活動として繰り返す)

計画を立てたら、次は実践します。この実践が一番大切です。子どもは日々成長、変容していくので、昨日まではうまく機能していた「戦略」が通用しなくなることがあります。したがって、実践しながら同時に振り返り、継続したり改善したりしていくことが必要です。ここでは <do→check→action> を一連の活動として繰り返していくことで、ゴールに近づいていきます。

● do : 実践する

計画に基づき、実践していきます。この時、教師が大切にするべきことは、仕事を子どもに任せっぱなしにするのではなく、称賛したり助言したり、常に子どもの活動に対し「見ているよ」というサインを送り続けることです。

また、子どもの活動に対して「お陰様で…ありがとう」というように常に感謝の気持ちを持つことが、子どもの活動への意欲を引き起こすことにつながります。

子どもたちを「活動するのが当たり前」「できて当たり前」ととらえるのか、それとも「活動してくれてありがとう」「できてすごい!」をとらえるのか、そこに教師の「教育観」が大きくかかわってきます。



● check : 途中での振り返りを忘れずに

次に大事なことは、自分の活動を振り返る時間と場を保障してあげることです。子どもには、計画したことが実践されているか、また、教師はその実践がゴールに向かっているか、という視点で活動を振り返ります。様々な取組（係活動、学級のイベント、席替え等）は、一見すると別々のもののように思われますが、めざすゴールは一緒であることを意識して指導することが大切です。

● action : 新たな手立ての必要性があれば改善する

子どもの活動が順調にいったいる時は、その手立てを継続していきます。うまく機能していない時は、子どもと一緒に新たな手立てを考えます。

その際、教師が「こうすれば…」と手立てを示すのは簡単です。しかし、子どもの主体性は育ちません。忙しい中にも子どもに考えさせる時間を保障し、子どもが決めたことを応援する立場で指導する心のゆとりを持ちたいものです。

【「係活動」で行うPDCA サイクルの例】

- P : 計画を立てる** * 「一人一人を大切に作る係活動とはどういうものか？」
・「どんな係が必要かな?」「どんな仕事をすればクラスの役に立つかな?」を考える。
・クラスに貢献できる係とその仕事内容を決める。
・一人一役、仕事を明確にする。 →教師の「教育観」に基づいて戦略を立てましょう。
- D : 実践する**
・活躍の場を保障する。 ・継続的に実践させる。
・認める、勇気づける、称賛する、助言する、を繰り返す。
→「あなたのことをいつも見ているよ」サインを送りましょう。
→「活動してくれてありがとう」感謝の気持ちを表しましょう。
- C : 振り返る** * 振り返る視点を与える。振り返る場を意図的に設ける。
・「係の仕事はクラスのためになっているのか?」 ・「一人一人の仕事はあるのか?」
・「さらに工夫改善することはないか?」 →戦略を教師の「教育観」に基づき、振り返りましょう。
・「一人一人を大切にしているか?」教師も子どもも、その視点で振り返る。
- A : 新たな手立てを考え、実行する**
・子どもに考えさせる。 ・教師も共に考えるが、決定権は子どもに持たせる。
→D・C・Aを繰り返しましょう。

(3) Check : 評価する Action : 改善する

ここでの評価は、学期末あるいは年度末に自分の学級づくりを振り返り、実践している戦略が機能しているかどうか、を評価します。そして新たな戦略を立て、次の学期または次の年度に実践していきます。

2 学級づくりを進める上での留意点

学級づくりを進める際、以下のような点に留意します。

(1) スモールステップで支援しよう

どんなによい戦略でも、一気にゴールにたどり着くものではありません。子どもにとって達成しやすい、身近な目標をスモールステップで与えながら、ゴールをめざしていきます。

その目標が達成できたら新たな目標を与え、それに向かって活動する、という繰り返りでゴールに近づくようにしていきましょう。

(2) 試行錯誤を認めるゆとりを持つ

子どもは活動する中で壁にぶつかりますが、自分で考え、乗り切っていきます。この経験が子どもを育てることになります。教師が効率を優先して、何でも用意してあげると子どもは成長しません。教師は子どもに試行錯誤させるゆとりを持ちましょう。

試行錯誤させる際は、できるだけ子どもの考えを尊重します。子どもに考えさせても、最後に教師が決定したのでは意味がありません。教師は、子どもと共に考える立場で支援することが大切です。

また、子どもは失敗から多くのことを学びます。同じ失敗を繰り返さないように次の活動を工夫するので、成功体験を味わうことができます。失敗しないように事前に防御策を練るよりは、子どもには「失敗から学ぶ」経験を大切にしたいものです。

子どもを尊重すると言っても、教師の出番はあります。例えば子どもの人権が侵害されたり、命が危険にさらされたりするような場面では、遠慮せずに指導しましょう。
「指導は遠慮はしない、しかし配慮はする」ことが大切です。



(3) 継続しよう

続けることが大切です。計画を立てることに労力を使い過ぎて、日常の見取りを怠ったり子ども任せにしたりしていると、活動は停滞しゴールを見失いがちになります。

活動をマンネリ化させないためには、4月に作成した学級経営案を日常的に活用することを心がけましょう。経営案に基づいて学級づくりの月計画、週計画を立て、「今月はこれを重点的に取り組もう」、「先月とった手法はうまくいっているか」等、振り返りながら活用することが大切です。

そのためにも、子どもから離れずに日常적인見取りを継続し、子どもを見取る目を鍛えていきましょう。また、週案等にも学級づくりの視点で、取組や子どもの活動の様子などを書きこむようにしましょう。

様々な手法を取り入れるのもいいですが、一つの方法でじっくり取り組むことも大切です。要は教師の「教育観」がしっかりしていることが大事です。



(4) あきらめずに指導しよう

学級づくりは長い道のりを一歩ずつ歩いていくようなもので、一朝一夕にはいきません。焦らずに、そして子どもの少しの進歩を見逃さずに支援していきましょう。全てがうまくいく方法や一度でうまくいく方法はありません。前述したとおり、試行錯誤しながらゴールに近づいていくものなのです。

また、一度うまくいった方法が、次に成功するとは限りません。子どもが成長すれば、戦略も変わることが前提です。しかし「教育観」に基づいたゴールは変わりません。諦めず、粘り強く、常にこれでいいのかを振り返りながらゴールに向かってください。「これでいいや、もう十分」と安易に妥協せずに、よりよいものを常にめざしていきましょう。

(5) 「教育観」をしっかりと

学級づくりは一年が勝負です。教師は次の年に別の子どもたちと共に学級をつくることができますが、今受け持っている子どもたちにとっては二度とない一年です。だからこそ、常に実践、振り返り、改善を繰り返しながら、学級づくりを進める必要があります。

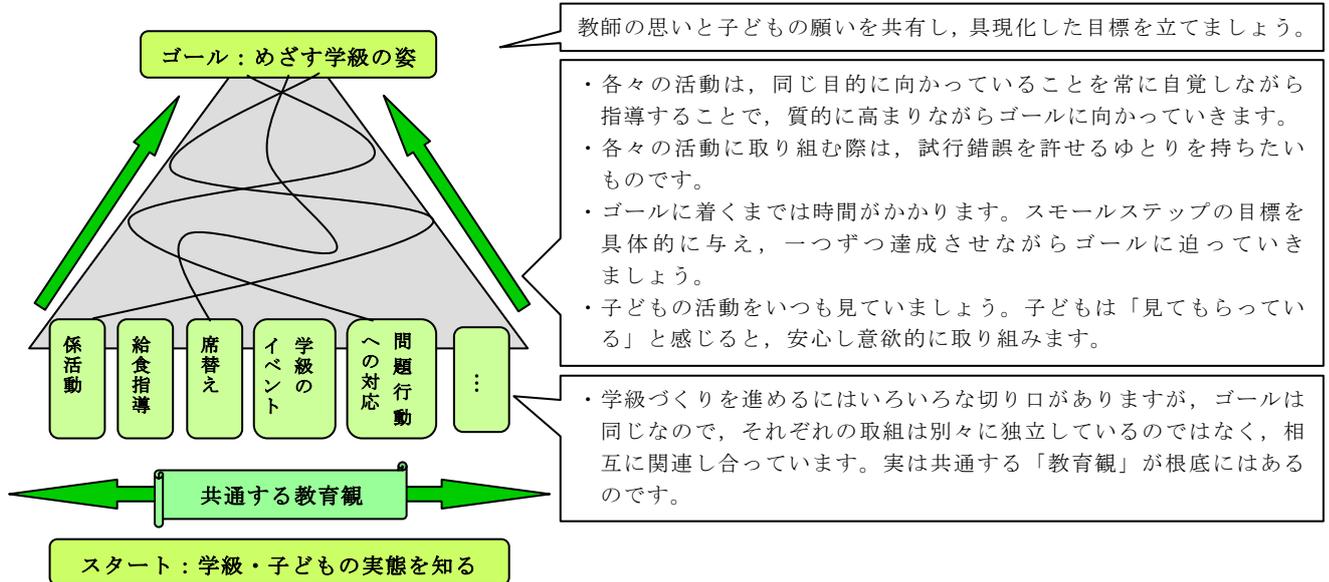
また、子どもからの信頼を勝ち取るには時間がかかりますが、信頼を失うのはあっという間です。だからこそ、日々ゴールを忘れずに「何のためにこの活動をさせているのか。」「この子どもをどう育てたいのか。」等、教師の「教育観」を忘れずに指導する必要があります。

このように、しっかりした自分の「教育観」に基づいてクラスマネジメントを進めることで、次のような効果が期待されます。

教師が、「教育観」を持って指導すると…

- ・めざす学級や子どもの姿を常に考えているので、学級目標をこれまで以上に意識するようになります。
- ・意図的・計画的に、学級づくりを進めるようになります。
 - 学級経営案や週案、及び学級づくりに関する年間計画の活用が図られます。
- ・ゴールに向かう縦方向の質的な高まりと、各々の戦略が関連しているという横方向のつながりが見えてくるので、無駄のない効率的な指導ができるようになります。
- ・指導における判断規準が明確になるので、ぶれることなく一貫した指導ができるようになります。
- ・教師の「教育観」が子どもにも反映されるようになります。
 - 教師が一人一人の子どもを尊重すれば、学級全体に一人一人を大切にする雰囲気生まれます。

【めざす学級を実現するために】



Ⅲ 学級づくりの実際 人間関係を育てる

1 個を育てる

今日、学級の中ではいじめや不登校、学級崩壊など、様々な問題が起きています。それを予防するためには、子どもたち一人一人を育てなければなりません。教師と子どもが信頼関係で結ばれることと、自己肯定感を育てることが必要です。

(1) 信頼関係づくり

学級づくりの第一歩は、子どもと教師の好ましい人間関係を構築することです。「好ましい人間関係」とは、「尊重」をベースにした信頼関係です。子どもたち一人一人は『認めてもらいたい』『自分の気持ちを分かってもらいたい』という欲求をもっています。教師がその欲求を「教育的愛情」で受け止めることで、子どもたちと教師の信頼関係が成り立っていきます。

●子ども理解

信頼関係の第一歩は、相手のことを理解することです。

そのためには、授業中、休み時間、給食の時間などに、教師の方から積極的に子どもたちにかかわることが必要です。様々な場面で子どもたちをよく見ること、学習状況や身体的な能力、一人一人の興味関心、友人関係、性格的な特徴などを理解することができます。

気になる子にはちょっとした手伝いを頼むなど、こちらから意図的にきっかけをつくり、話をすることが必要です。終わった時には「ありがとう」という感謝の言葉を添えましょう。

子どもたちの中には、みんなの中に入れない子や、外遊びが好きではない子もいます。「一緒に遊ぼうよ」と誘うことや、教室でおしゃべりをしたり、読書をしたりすることも必要です。



●客観的に見る

子どもを理解しようとするとき、特に目立つ面だけをとらえてその子のすべてを理解したと勘違いしないようにしましょう。特に一度の問題行動で悪い印象をもってしまうと、無関係なことも悪く評価してしまいがちです。その子のありのままの姿を把握し、多面的多角的で客観的な資料を集めるようにしましょう。他の教職員との情報交換や本人・保護者との面談から、自分では見つけられないその子のよさや得意なこと、悩み、生育歴などを知ることができます。

●「私メッセージ」

自分の気持ちを上手に伝える方法の一つに「私メッセージ」があります。これは「私」を主語にする話し方で、基本的に、[相手の行動] [その影響] [自分の気持ち] で構成されています。一方、「あなた」を主語にしたものは「あなたメッセージ」と言います。

【「あなたメッセージ」と「私メッセージ」の例】

- ◇ 「あなたメッセージ」 「君たちはどうして掃除ができないんだ！ もっときれいに掃きなさい！」
- ◇ 「私メッセージ」 「君たちがきれいに掃いてくれると、教室がきれいになって、
[相手の行動] [その影響]
私はうれしいんだけどな。」
[自分の気持ち]

上の2つを比べたとき、「あなたメッセージ」は、相手を非難し、命令しているので、素直に聞き入れにくい表現になっています。一方、「私メッセージ」は自分の気持ちが表現されているので、その分、相手にとって受け入れやすく、信頼関係が成立しやすくなっています。

●自己開示

自己開示とは自分の情報を開示することです。その中には自分の弱い部分も含まれるので、信頼できる相手でないとうち明けられない傾向があります。相手からすると、信頼してくれているからそのような内容を話してくれたと感じるので、自己開示された相手は自分も自己開示をしやすくなり、人間関係が深まります。

初対面の人に個人的な自己開示をしても、逆効果です。相手との関係性に合った内容の自己開示を心がけ、一步步信頼関係を築きましょう。



【自己開示の例】

- ◇「それは先生も分からないから、次の授業までに調べておきます。」
- ◇「そのことについて先生は～だと思います。」
- ◇「先生も小学生の時、今の〇〇さんと同じような失敗をしたことがあります。それは～」

●「傾聴」

自分から話しかけることと同じように大切なのは、温かい心で子どもの話に耳を傾けて聴くことです。これを「傾聴」と言います。「傾聴」で何より大切なことは、相手を尊重してじっくりと話を聴くことです。

休み時間に子どもが話しかけてきたら、今やっていることをいったん止めて、子どもの話に耳を傾けましょう。途中で疑問や批判をはさまずに最後まで聴きます。また、授業中、子どもの発言が教師の意図したものではなかったとしても、流してしまうことなく最後まで聴き、「〇〇さんは～と考えているんだね」と確認しながら進める必要があります。

相手を「受容」し、「共感的な理解」に努める姿勢が信頼関係を生むのです。教師が受容的で共感的な雰囲気をもっていると、子ども同士の関係も落ち着いてきます。

相手を尊重して、話に耳を傾けていると、自然と相手の目を見たり、うなずいたり、相づちを打ったりすることになりますね。



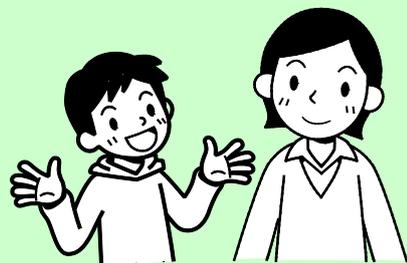
コラム

「受容」と「共感的な理解」

「受容」ということは、相手の示す考えや感情に対して、評価したり解釈したりせずに聴くことです。信頼関係を築くためには、このような態度が必要です。

一方、「共感的な理解」とは、あたかも相手になったかのような姿勢で相手の話を聞くこととされていますが、具体的には「相手を理解しようとしていることを相手に伝える姿勢」ととらえます。つまり「あなたが言ったことは～ということによってよいですか」などと、丁寧に確かめながら聴くことです。

ただし、「受容」も「共感的な理解」も、相手に同情することや、相手の言動をすべて正しいと認めることは違いますので、注意が必要です。例えば、暴力を振るった子に対して、その行為に共感し、正しいと認めることはできませんが、怒りの気持ちに共感することはできます。気持ちを「受容」し、「共感的に理解」することで、子どもに「先生はぼくの気持ちをわかってくれた」と感じさせることが大切です。



(2) 自己肯定感を育てる

自己肯定感とは「自分はかけがえのない存在なのだ」と思える気持ちのことです。今の子どもたちの心の問題は「自己肯定感」の低さに起因している、と言われていました。

一般に自己肯定感が低く、自分のことを大切にできない子は、他人のことも大切にすることができません。自己肯定感を育てることで好ましい人間関係を築くことができるのです。

●子どもたちを「見ていること」

私たち教師は、子どもを毎日見っていますが、本当に見なくてはいけないのは、一人一人のよいところや努力しているところです。そして、それらを「見ていること」を子どもたちに伝える必要があります。下のような言葉かけから子どもたちの自己肯定感は育っていくのです。

また、子どもたちがしてくれたことには感謝の気持ちを伝えることが大切です。たとえそれが当番の子であったとしても「ありがとう」の気持ちを伝えましょう。そうすることで「ぼくはクラスのために役立っている」という自己有用感を育てることができるのです。

子どもたちを「尊重」しているからよさを見つけることができ、感謝の気持ちを伝えることができるのね。



【「見ていること」を伝えている例】

- ◇ノートの字がきれいだったら → 「きれいな字で書いているね。」
- ◇友だちに親切にしていたら → 「〇〇さんのそういうところ、すごくいいなあ。」
- ◇まじめに勉強したのにテストの点が悪かったら → 「でも、まじめに努力していたじゃない。」

【感謝の気持ちを伝えている例】

- ◇給食の後始末をした子に → 「給食の後始末をしてくれてありがとう。」
- ◇黒板係の子に → 「〇〇君のおかげで黒板はいつもきれいだね。とても書きやすいよ。」

●コーチング

コーチングとは、目標実現、問題解決のために、自発性を促し、行動を引き出すコミュニケーションです。

一方、普段私たち教師が行っているのはティーチングです。ティーチングは教師が答えを与えるものなので、教師が知っている答え以上のものは出てきませんし、その答えがその子には適したものではない可能性もあります。何より、ティーチングばかりだと、子どもは教師の答えを待つようになり、失敗したときは自分で責任を取らなくなります。

コーチングは子どもの可能性を信じて、自分で自分の中から答えを引き出すことができるようにサポートします。

その結果、自分ができそうな方法を、自分で考えるようになります。それがうまくいったときには、「私もやればできる」という自己効力感をもつことができます。

【ティーチングからコーチングへ】 (課題を提出しなかった子に対して)

ティーチング	コーチング
T: 課題、まだ提出してないよね。	T: 〇〇君、君の課題が見えないんだけど…。
C: すみません。終わってません。	C: すみません。まだ終わってなくて出せませんでした。
T: どうして? 一週間も前に出してあるだろう!	T: そうか、終わってないんだ。そういえば、土、日曜日は試合だったね。
C: はい…土、日曜日は部活の試合があったりして…。	C: はい、それもあったんですけど…。
T: そんなの、みんな同じだろう!	T: それだけじゃないの?
やる気がないだけじゃないのか!	C: はい、他の教科の課題もあって…。
C: すみません…。	T: 忙しかったんだね。一週間では無理だったのかな?
T: 明日の朝までには提出できるよね!	C: いいえ、僕の見通しが甘かっただけです。
C: はい…。	課題は明日の朝までに提出します。

数多くあるスキルの中から、ここでは最もコーチングらしい質問のスキルを紹介します。

◇「開いた」質問をしよう

右の2つの質問を見てください。Aは、「はい」か「いいえ」で答えることができます。これを「閉じた」質問と言います。

A「サッカーは好きですか？」
B「サッカーのどんなところが好きですか？」

一方、Bは「はい」「いいえ」では答えられず、話が広がっていきます。これを「開いた」質問と言います。

「開いた」質問によって、これまでも子どもの中にあっただのに意識していなかったことに気づかせ、問題解決に向けての第一歩を踏み出させることができます。

◇「未来に向けた」＋「肯定的」な質問をしよう

私たち教師は、Cのように、問題の原因を探ることで問題を解決しようとしがちです。これは、過去のことを否定的にとらえた表現になっているので、素直に聞き入れることは難しそうです。そこで、Dのような努力可能な「未来に向けた」質問を心がけましょう。

ここで示した例は、「～できるようになるだろう？」という、「肯定的」な質問にもなっています。

このような「未来に向けた」＋「肯定的」な質問に対しては、子どもは前向きになり、問題解決に向かいやすくなります。

C	D
T：どうして家庭学習が <u>できなかったの</u> ？	T：どうすれば家庭学習が <u>できるようになるだろう</u> ？
C：えーと、(言い訳を考えると)部活で疲れちゃって…。	C：何をするか決めておく。 T：どうすれば決めておけるかな？

ここで取り上げた質問のスキルは、子どもを信頼しているからできるのです。そして、子どもの話を「傾聴」するからこそ適切な質問をすることができるのです。

●リフレーミング

C：先生、ぼく、飽きっぽくて、何をやっても長続きしないんです…。

T：君は好奇心が旺盛だからね。いろいろなことにチャレンジしてみればいいんじゃないかな。

リフレーミングとは、心理的枠組みを変えていくことです。つまり、同じものを別の角度から見ることです。学校教育では、上のように短所だと思っていることの見方を変えて、長所としてとらえ直すことに使われています。

子どもは「飽きっぽい」という自分の短所について教師に相談していますが、教師はそれを「好奇心が旺盛」と別の角度から見て、子どもに長所として認識させています。

その後、具体的なアドバイスも行っています。

このように、自分では短所だとらえていたことを、長所だと認識し直すことで、自己肯定感を育てることができます。

【リフレーミングの例】

- ◇頑 固 → 意志が強い
- ◇気 が 弱 い → 慎重
- ◇こ だ わ る → 最後までやり通す
- ◇引 っ 込 み 思 案 → 余分なことは言わずにこつこつとやる
- ◇プ ラ イ ド が 高 い → 自分に自信がある
- ◇優 柔 不 断 → よりよい方法を考えている

●改善点を指摘するには

実際に子どもたちを指導していると、どうしても「ここを直してほしい」「これをもう少し頑張してほしい」という場合が出てきます。

そのようなときによく使われるのが下のAのような方法だと思います。

A「英語は頑張っているね。成績も上がってきたよ。でも理科が問題だね。もう少し頑張ろう！」

B「英語は頑張っているね！ 成績も上がってきたよ。これで理科がさらによくなると素晴らしいよね！理科の勉強をされていてわからないことがあったら、〇〇先生のところへ質問に行ったらどうかな？」

最初に頑張っていることを認めているので、柔らかい感じにはなっているのですが、人間には最後に言われたことが印象に残ってしまう傾向があります。この場合は最後に改善点を指摘されているので、「英語は頑張っている」と言われたことよりも、「理科が問題」と言われたことの方が印象に残り、苦手意識をもってしまう可能性があります。

一方、Bは「英語は頑張っている。理科ができるのもっといい」という伝え方です。そして「〇〇先生のところへ質問に行ったら」という具体的な取り組み方も示しています。わずかな違いですが、この伝え方のほうが自己肯定感を損なわずやる気を出させることができます。

子どもたちに改善点を指摘しなければならないときには、苦手意識をもたせてしまうことのないように気をつけましょう。



2 集団を育てる

子どもたち一人一人に力をつけることと同時進行で、「集団を育てる」ことをしなければ、学級づくりは成功しません。子どもたちは集団の中にいるからこそ、個性が明確になるし、役割も与えられます。個性を伸ばし、役割を果たすことで、個人の力は育ちます。集団があるからこそ個人が成長するのです。もし、集団が集団としてのつながりをもたなければ、個は育ちません。

つまり、「集団を育てる」ということは、子どもの個性を大切にしながら、一人一人を丁寧につないでいくことです。

(1) 子ども同士が認め合う

一人一人をつなぐとは、そのメンバーが互いに認め合うことができるようにすることです。そうすることで一人一人が安心してそこに居ることができ、自分の力を発揮できるようになります。



●学級の状態を把握する

子どもたち一人一人を育てるためには一人一人を理解することが必要のように、学級集団を育てるためには、その学級集団の状態を理解することが必要です。子どもたちの心理面が変化してきている今日、心理テストなど学級集団の状況をより客観的で適切に把握するための一つの方法と考えてもよいでしょう。

コラム

Q-U

Q-U (QUESTIONNAIRE-UTILITIES) という心理テストは「いごちのよいクラスにするためのアンケート(学級満足度尺度)」と「やる気のあるクラスをつくるためのアンケート(学校生活意欲尺度)」の2つから構成されている、標準化された心理テストです。この2つからわかることは、

- ①個人についての情報
- ②学級集団についての情報
- ③学級集団における子どもたちの相対的位置

の3つです。これらを解釈することで、不登校、いじめ、学級崩壊等に対応するためのデータが得られます。

●違いを認め合う

今の子どもたちは、3～4人の固定されたグループで過ごすことが多く、そこから「はずされる」ことを恐れ、人と違うことや、目立つことをしないようにしています。これでは一人一人の力を発揮することはできません。お互いの違いを認め合えるようにすることで、安心感のある学級になります。

そのために「人間は一人一人がみんな違う」という当たり前のことを、教師が折に触れて話をしたり、一人一人のよさを積極的にほめたりすることが必要です。自分のよさを認めてもらえた子は、他の子のよさを認めることができるようになります。

●構成的グループエンカウンター

構成的グループエンカウンターとは、集団を対象とした開発的なカウンセリングです。ホンネとホンネのふれあいを通して、集団内にリレーション（お互いに相手を尊重しながら感情交流ができる関係）をつくることと、自己発見する（これまで気付かなかった、あるいは気付いていても表現できなかった自分をオープンにしていく）ことをねらいとしています。

構成的グループエンカウンターは、下の順序で実施します。たくさんのエクササイズの中から、ねらいや学級の実態に合ったものを選ぶことが必要です。最後のシェアリングは、基本的に4人のグループで行います。個々の感想を周囲が否定せずに聴くことで、お互いを尊重する経験をすることができます。これを行うことで単なる「ゲーム」で終わることがなくなります。

このように互いの思いや考えを肯定的に聴くことを「聴き合い活動」と言っています。この「聴き合い活動」はほかにも、一つの正解を求めず、子どもたちの感じ方を尊重するような学習の場面で取り入れることができます。

コラム

構成的グループエンカウンターの進め方

①インストラクション

教師が、これから行うエクササイズの目的、やり方、ルールなどを説明します。

②ウォーミング・アップ

エクササイズに入りやすくするために、簡単なゲームを行います。

③エクササイズ

心理的側面の発達を促すための課題を行います。

ねらいとエクササイズの例は以下のとおりです。

- ◇自己理解・他者理解：「いいとこさがし」「私は私よ」
- ◇自己受容：「自分への手紙」「いいとこ川柳大会」
- ◇自己主張：「〇かな×かな」「私の話を聞いて」
- ◇感受性の促進：「イメージの小旅行」「別れの花束」
- ◇信頼体験：「ゴリオリゲーム」「トラストワーク」

④シェアリング

エクササイズにより気づいたり、感じたりしたことをホンネで伝え合い、分かち合います。気づきや感情を明確化し、ねらいを定着させます。

構成的グループエンカウンターを実施する際には、教師が「学級の実態が△△だから、このエクササイズを実施して、〇〇の状態になってもらいたい」という意図をもって、計画的・継続的に行うことが大切です。また、シェアリングの場面では、子どもたちが慣れるまで、教師が積極的に介入して進めるようにしましょう。



●ピア・サポート

ピア・サポートとは、子どもたちが互いに支え合い、助け合うような関係を持つことです。仲間を支援する体験を通して自分を見つめ直すことで自己成長にもつながり、思いやりあふれる学級ができるようになります。

※ 千葉県では「豊かな人間関係づくり実践プログラム」として、小学校1年生から中学校3年生まで、体系化されたプログラムが用意されています。「周りの人を大切にするスキル」と「自分を大切にするスキル」を各学年で4時間学んでいます。ただし、これは「教育モデルに基づくピア・サポート」であり、「カウンセリングの考え方に基づくピア・サポート」とは異なります。

●アサーション

アサーションとは「自他尊重の自己表現」という意味です。自分の意見や気持ちをきちんと「伝える」と同時に、相手の話も十分「聴く」ことなので、互いを尊重する人間関係を育むことができます。

コラム

アサーティブな表現方法

自己表現の方法は大きく分けて3つあります。アサーション・トレーニングでは③の自己表現が身につくことをねらいとしています。

- ①アグレッシブ（いばりやさん）：自分のことを優先し、他者を無視・軽視する自己表現
 - ②ノン・アサーティブ（おどおどさん）：自分よりも他者を優先し、自分のことを後回しにする自己表現
 - ③アサーティブ（さわやかさん）：自分のことをまず考えるが、他者のことも十分配慮する自己表現
- 具体的な例を以下の場面を使って説明します。

あなたは友だちのAさんと、お昼ご飯を食べようとしています。
Aさんは「イタリアンのお店に行こう」と言いましたが、あなたは昨夜もイタリアンを食べているので、他のお店がよいと思っています。

- ①アグレッシブな表現
「私はいやよ。他のものが食べたいんだから！」
- ②ノン・アサーティブな表現
「えっ！ そう、イタリアンがいいんだ… うーん… じゃ、イタリアンにしようか…」
- ③アサーティブな表現
「ごめんね。私、昨夜もイタリアンだったの。この近くにおいしい和食のお店があるんだけど、よかったらそこにしない？」

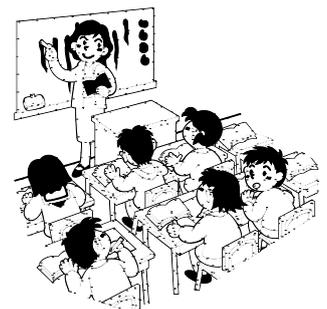
(2) 授業を通して人間関係をつなぐ

学級の子どもたち全員が、最も長い時間一緒にいるのが授業です。集団で学ぶという特性を生かして、互いに認め合い、協力し合うことの大切さを感じさせることが大切です。そうすることで共感的な人間関係を育てることができます。

●失敗や試行錯誤が許される雰囲気

「授業中に自分の考えを発表したけれど、間違っていて友だちに笑われた」という経験をしたら、その子は発表することが嫌になり、誰かが正しい答を教えてくれるまで待つようになってしまいます。

教師は正しい答だけを評価するのではなく、自分で考えたことや頑張ったこと、自分の考えを発表したことのよさを認めて、温かい言葉をかけてあげることが必要です。そして、誰でも間違えることがあることを子どもたちに伝えます。そうすることで、失敗や試行錯誤が許される雰囲気ができ、学級は子どもたちにとって、安全な居場所となります。



●一人一人が活躍できる授業を

一人一人が大切にされ、それぞれが活躍できるような授業を行うことで、子どもたちは互いに認め合うようになります。そのためには子どもたちの学習状況や特性を理解し、どの場面でもどの子が活躍できそうか、考えておく必要があります。

また授業中には、個別指導の時間を取り、その子に応じた支援を行ったり、ほめたりすること、一人一人の考えを出し合う場を設定し、丁寧に対応することなども大切です。

●互いが認め合える授業を

子どもたちが授業で認め合うようになるためには、まず教師が子どもたちに温かい言葉をかけることが必要です。授業中には「今の〇〇さんの考えはどうですか？」と問いかけることや、友だちの意見を聞いてうなずいている子をほめるなど、子どもたち同士が評価し合う場面を積極的につくるのが効果的です。図工（美術）などの作品を鑑賞し合い、工夫している点を書き合うこともよいでしょう。

その他にも、グループごとに課題に取り組む活動や、話し合いによってお互いに歩み寄る経験をすることも大切です。

(3) 一体感をつくる

学級を育てるということは、子どもたちに「この学級が好きだ」という思いをもたせることだととらえます。そのためには「みんなでこの学級をよい学級にしよう」という目的に向かって協力できるようにすることが必要です。もちろん、常に全員が同じ方向を向いている必要はありませんが、いざというときにはみんなが協力できるように、様々な活動を通して一体感を高めていくことが必要です。

●行事

行事は子どもたち一人一人を育て、学級をまとめていく絶好のチャンスです。一つの目標に向かってみんなで協力したり、時には葛藤したりする体験は、自分の意見を主張するばかりではなく、相手を尊重したり、折り合いをつけたりすることを通して、一体感を育てます。

仲間と協力してつくり上げた行事は、達成感などの感動体験を生むと同時に、学級というチームワークを育てることができます。

教師は一つ一つの行事で子どもたちにつけたい力を明確にし、子どもたちが主体的に取り組むように指導することが必要です。

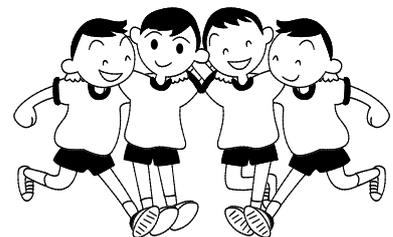
●リーダーを固定しない

学級をまとめていくための近道として、リーダーの育成を挙げる方も多いと思われます。しかし、リーダーを固定してしまうと、それ以外の子どもたちは「どうせ私たちは、リーダーの言うとおりにしていれば…」などと考え、表面上はまとまっても、いざというときにまとまりがなくなってしまうことがあります。

一人一人を大切にしながら学級をまとめていくためには、誰もがリーダーを体験できるようにする必要があります。リーダーを固定しないことで、「私も次はやってみようかな」という前向きな気持ちがわいてきます。

学級で何か一つのことを成し遂げるといことは、リーダーがいくら頑張っても、一人の力だけでは不可能です。学級のみんながリーダーを支えることで、はじめて成功するのです。このことを体験的に理解した子は、必ず次のリーダーを支えるようになります。

「リーダーが頑張ってくれたおかげで成し遂げることができた」という思いと、「みんなが支えてくれたから成し遂げることができた」という思いは、学級を一つの方向に向け、感動をみんなに味わわせてくれます。このような体験を積み重ねることで、学級がまとまり、成長していくのです。



Ⅳ 学級づくりの実際 規範意識を育てる

1 規範意識を育てる場

今の子どもたちは、基本的な生活習慣が不十分であることや言葉や暴力によって人を傷つけるなどの人権を無視した問題行動が増えていることなどから、規範意識の低下が指摘されています。

そこで我々教師は、学校生活のあらゆる場において、ルールを守ることや人としてやってはいけないこと、場に応じた望ましい行動をとることを指導することが求められています。さらに、心から規範を守ろうとする気持ちが育つような働きかけを通して、仲間を思いやる心や協力する姿勢を育み、安心して過ごすことのできる学級集団を育てていく必要があります。

(1) 学級開きで確認する

学級開きの季節、子どもたちは期待に胸をふくらませて登校し、素直でやる気に満ちています。これは、担任の方針やルールを浸透させるには絶好のチャンスといえます。

教師は、「こんな学級にしたい」というめざす学級の姿を掲げ、教師の願いや思いを伝えます。そして、めざす学級の姿の実現に向けて、子どもたちに身に付けてほしいことを明確に打ち出し、そのために必要なルール等を子どもたちと一緒に確認することが大切です。

また、ルール違反した子は見逃さずにはっきりと指摘し、かつ、ルールを守って活動した子には積極的にほめるような意識的な対応が求められます。教師がイニシアティブをとることで、子どもたちは「学級は安全で安心できるところだ」という意識を持って過ごすことができるのです。

独りよがりにならずに、同じ学年の先生方と積極的に意見交換をし、共通理解をした上で学級開きを行いましょう。

また、先輩の先生方はいろいろなアイデアを持っています。積極的にアドバイスをもらい、自分を高めていきましょう。



【学級開きで確認すること】

- 1 学級の経営方針（めざす学級の姿）を伝える
 - ◇こんな学級をつくりたい
 - ◇学級はチームである
 - ◇いじめは絶対にゆるさない
 - ◇かけがいのない命を大事にする 等
- 2 ルールやマナーの確認をする
 - ◇校則
 - ◇学級のルール
 - ◇挨拶等の基本的な生活習慣 等
- 3 学級の仕組みづくりをする
 - ◇号令の仕方
 - ◇朝の会・帰りの会の進め方
 - ◇当番活動の仕方
 - ◇委員会・係活動の仕方
 - ◇給食のマナー
 - ◇掃除の仕方 等

めざす学級の姿の実現に向けて、しっかりした教育観を持ち、一貫性のある指導を心がけましよう。

(2) 話し合いでつくり出す

時には学校生活の中で感じる問題点を見つめ、学級で話し合いを行うことが必要です。

そしてその話し合いを通して、必要なルールをつくり出したり合理的でないルールは修正したりしていくことが大切です。このことにより、ルールとは「強制されるもの」というイメージから、「自分たちのためにある大切なもの」というイメージへと導いていくことができます。

ルールを話し合いで決めるとき、めざす学級の姿に近づくためには何が必要なのかを子どもたち自身に投げかけます。

そして子どもたち自身で考えることで、学級や仲間を大切にできる気持ちや学級のために頑張ろうとする気持ちが芽生え、自治的な学級に育っていきます。



子どもたちが話し合いでルールをつくり出すことにより、次のような効果が期待できます。

- ・ルールを自分たちのものとして大事にし、守って行こうとする主体性が生まれます。
- ・話し合いを通して、物事を意欲的に決めていこうとする姿勢や仲間との話し合いを大事にする態度が養われ、学級への所属意識が生まれます。
- ・「先生に任せてもらえたんだ」という喜びと教師に対する信頼感も生まれます。

教師の願いや思いを受け、子どもたち自身で一生懸命に話し合って決めたルールこそ、子どもたちにとって本当に価値のあるルールとなるはずです。

そのルールの先には学級の仲間が共有するめざすゴールが見えるようになっていくことが理想です。



(3) 道徳教育で考えさせる

道徳教育は、規範意識を育てるためには欠かすことのできないものです。道徳教育を大切にすることで、子どもたちにルールを守ることの必要性や、マナーやモラルを大切にすることのよさに気付かせることができます。

道徳の授業では、ルールを守れないという人間的な弱さに共感したり、マナーやモラルを守る場合と守らない場合とでは何が違うのかを考えたりします。このような学習を繰り返して行うことで、場に応じたよりよい行動について理解を深めていきます。

そして、「道徳の授業で培ったこと」と「日常生活や行事などの体験活動」を意識的に関連させていくことにより、さらに効果的な指導が期待できます。

☆学習指導要領では、道徳教育の内容を発達段階に応じて指導内容を明確化し、重点化を図っています。

【小学校の重点】

- ◇各学年共通：「各学年を通じて自立心や自律性、自他の生命を尊重する心を育てることに配慮する」
- ◇低学年：「あいさつなどの基本的な生活習慣を身に付けること」「社会生活上のきまりを身に付けること」「善悪を判断し、人間としてしてはならないことをしないこと」
- ◇中学年：「集団や社会のきまりを守ること」「身近な人々と協力し助け合う態度を身に付けること」
- ◇高学年：「法やきまりの意義を理解すること」「相手の立場を理解し、支え合う態度を身に付けること」「集団における役割と責任を果たすこと」

【中学校の重点】

- ◇「自他の生命を尊重すること」
「法やきまりの意義の理解を深め、主体的に社会の形成に参画すること」



どの重点内容を見ても規範意識を育てることの必要性がうかがわれますね。

(4) 授業の中で育てる

授業をきちんと成立させるためには、授業の前に道具の準備する、チャイムがなったら着席する、発表するときはしっかり手を上げるなどの基本的な学習ルールが定着するように徹底して指導することが大切です。学習ルールを定着させることで、子どもたちの学びを保障していきます。

また、話を聞く態度や話し合いの仕方を育てることで、誰もが安心して発言ができる雰囲気をつくるとともに、お互いの意見や気持ちを尊重する姿勢を育てていきます。

学習のルールが定着し安心して学ぶことができる学級は、学び合う喜びを味わえると同時に、ルールを大切にしたい気持ちなどの規範意識も高まります。

2 規範意識を育てるための心構え

規範意識を育てるためには、教師がしっかりと教育観を持って、子どもたちと向き合うことが大切です。また、一度の指導で終わらせることなく、あらゆる場面を通じて意図的・計画的に指導していくことが望まれます。

(1) 率先垂範

日ごろ、教師としてのふるまいはどうでしょうか。子どもたちに身に付けてほしい行動は、まず教師自身が率先してやって見せ、子どもたちのよき手本となりましょう。

子どもたちは教師のふるまいを見て育っていきます。よき手本を見せてあげることで、教師の信頼も増して、子どもとの人間関係も良好となっていくことでしょう。

【自分のふるまいをチェックしてみよう！】

- ◇元気よくあいさつしていますか？
- ◇チャイムが鳴る前に教室にいますか？
- ◇言葉遣いに気を遣っていますか？
- ◇きちんとした服装をしていますか？
- ◇子どもと一緒に掃除をしていますか？
- ◇子どもを励ます言葉かけをしていますか？



(2) 愛情を注ぐ

規範意識を育てるために大事なことは、教師が子どもたちに愛情をもって接することです。

日ごろから教師が子どもたちに愛情を注ぐことで、子どもたちとの信頼関係が深まるとともに、学級への愛着心や仲間を思いやる気持ちが芽生えてきます。そして、子どもたちが仲間や学級を大切にする気持ちが育つことで、自分勝手な行動をすることもなくなってきます。

また、時には叱られるようなことがあっても、教師の思いが心に響き、素直に受けとめることができるようになることでしょう。

(3) 時には毅然とした指導

学校生活の中で、命に関わるようなことや人格を否定するようなことがあった場合、教師は毅然とした態度で粘り強く指導しなければなりません。

そのためには、日ごろから「これは絶対に許さない！」というメッセージを子どもたちに徹底して伝えること、一貫した基準をもって指導にのぞむことが必要です。

時には毅然とした指導を通して、命を大切にすることや人としてしてはいけないことを理解させ、学級が子どもたちにとって安心・安全で居心地のよい空間となるように努めていきましょう。

子どもの心が離れることを恐れて、叱れない教師になってはいけません。

悪いことをした子どもには、遠慮せずにきちんと指導することが大切です。

しかし、配慮は忘れずに指導しましょう。



●叱ることの意味

子どもを伸ばすためには、ほめることが大切ですが、時には厳しく叱ることも必要です。

叱るときに一番大切なことは、叱り方のテクニックよりも叱るという行為の裏側に「思い」があるかどうかです。普段から、子どもと気持ちがつながっていて、真に子どものことを思う気持ちが強ければ、時には厳しく叱ることがあっても思いが通じ、よい効果をもたらすものです。気持ちを込めて本気で向き合うことが、何よりも大切なことなのです。

【叱る時に気をつけること】

- ◇人格を否定するのではなく、誤った行動を叱る。
- ◇感情的にしからずに、冷静に叱る。
- ◇くどくど言わず、短く叱る。
- ◇叱るタイミングに気をつける。
- ◇以前のことを持ち出して叱らない。
- ◇子どもを追いつめるような叱り方はしない。
- ◇叱り方に一貫性をもち、公平に叱る。
- ◇事実を確認してから叱る。
- ◇叱ったあとのフォローを忘れない。
- ◇他の子どもと比較しながら叱らない。
- ◇他のことも一緒にして叱らない。

【叱る時に伝えたいこと】

- ◇自分がやってしまったことに対して、これからどうなってしまうのかを考えさせる。
- ◇どうしてこうなってしまったのかを考えさせて、困っている人の気持ちに気付かせる。
- ◇この先どうしたらよいかを子どもと一緒に考え、意見を引き出す。
- ◇傷つけたり迷惑をかけたときには、その人に対して素直に謝ることの大切さを伝える。

(4) 凡事徹底 (ぼんじてっい)

「凡事徹底」とは、当たり前と思われることを大事にし、それを徹底して行うことです。

これは、ビジネス社会における魅力的なリーダーの必須条件としてよく挙げられている言葉です。会社の状況は、従業員の挨拶、整理整頓、トイレ掃除の3つを見れば大体わかると言われています。

このことは、我々教師にも通じることです。自分自身に対して凡事徹底を心がけるとともに、子どもに対しても当たり前と思われることが当たり前できるように、身に付くまで徹底して継続指導することが大切です。

そうすれば、当たり前のことが当たり前に行える規律のとれた学級集団へと変化することでしょう。

また、基本的なことが自信をもってきちんとできるようになった子どもは、他のこともできるようになる効果も期待できます。

毎日行う挨拶ひとつ取ってみても、明るく元気に笑顔で行う人と、しかたなく行う人では、相手に与える印象等の結果はまったく違ってきます。

当たり前のことを、毎日積み重ねていくことこそ、教師として欠かすことのできない大事なことなのです。



V 学級づくりの実際 同僚・保護者との関係づくり

1 同僚の教職員とのかかわり

同じ職場で働く仲間として、協力・協働は欠かせないことです。特に教育の現場において教師集団がバラバラでは、子どもたちや保護者からの信頼を得ることなどできません。また、学校の教育目標を具現化するには、教師が一丸となって目標達成に向けて取り組む必要があります。

では、他の教師との協力体制をつくるには、どうすればよいでしょう。それには、日常のコミュニケーションをしっかりととるようにすることが求められます。

(1) 同僚とのコミュニケーション

●挨拶はきちんと、受け答えはハッキリ

人間関係の基本は、挨拶です。元気に挨拶をすることは、この世界でも大切です。特に学校では、教師は子どもたちの手本となるわけですから、教師がしっかり挨拶することで、挨拶ができる子どもが育ちます。

また、日常のやり取りで曖昧な受け答えをすることは、うまくコミュニケーションがとれず仕事にも支障をきたします。

●自分から進んで他の人の仕事を手伝おう

自分が困っているとき、誰かが助けてくれる。そんな職場は、人間関係が円滑で仕事もはかどります。まずは自分が、「何かできることはありませんか?」「お手伝いします。」と積極的に他の人の仕事を手伝う姿勢を持ちましょう。

●職員室での会話は情報の宝箱

子どもたちのことを日常的に話し合い、共通理解を図ることや学習指導や生活指導について、教師それぞれの経験や知識を共有し合うことは、仕事を円滑に進める上でとても有効なことです。

そして、困っていることなどを話し合い、お互いにアドバイスし合う事ができれば、一人で困ったり悩んだりしなくてもよくなります。

子どもたちの学習や生活についての話は職場でしかできません。職員室では積極的にコミュニケーションをとり情報交換を行うようにしましょう。

同じ職場で働く仲間とのコミュニケーションは、欠くことのできないものです。

お互いに気持ちよく仕事をするために、礼節をわきまえて接してください。

日ごろからの人間関係がいざという時に生きてきます。



学校で働く職員は、教師だけではありません。事務職員は、担任とは違った面から家庭や子どもの状況等を把握しています。

積極的にコミュニケーションを図り、情報交換をするよう努めましょう。



●約束、時間を守る

人間として当たり前の話ですが、約束や時間を守らないことは他の人の仕事に支障をきたします。忙しい職場において時間は貴重ですから、約束・時間を守らないことは、人間関係にも支障をきたします。教師は、約束や時間を守らない子どもに、次はしっかりやろうと辛抱強く指導しています。しかし、これは大人に対しては甘やかさずであり、当然許されることはありません。教師自身は、大人として自分を甘やかすことなく、時間・約束を守らなければなりません。

(2) 同僚とのコミュニケーションにおける留意点（悩みごとは一人で抱え込まない）

学校の仕事で大切なことは、組織として対応することです。このために自ら積極的にコミュニケーションをとり、自分が今取り組んでいる仕事を他の教師に知ってもらうことが大切です。悩みごとなど一人で抱え込むことなく、みんなに知ってもらうことで助けてもらえることもあります。教師同士、お互いに支え合うことが求められます。

●「ホウ・レン・ソウ」は確実に！

何か困ったことがあったとき、何事も早めに相談することで適切な対応ができ、大きなトラブルを回避できます。このために、自分のやっていることをオープンにして常日ごろから理解してもらうことが大切です。どの職場においても言われることですが「報告・連絡・相談」は仕事の基本です。

●質問上手、教わり上手になろう

学校は、“教えるプロの集団”です。そして、どの教師にも自信を持って語れる得意分野があります。そのような教師にどんどん質問して教わることで、教師力を高めていくことができます。質問上手、教わり上手の条件は謙虚さと感謝の気持ちです。常に相手への敬意を払い接するよう心がけることが大切です。

●養護教諭と連携しよう

学校の教師集団の中で、担任も知らない子どもたちの情報をつかんでいるのが養護教諭です。また、気になる子どもと一緒にあって見守ってもらえます。養護教諭とは定期的に情報交換を行い連携を深めていくことが大切です。

(3) チームワークづくりに求められるバランス感覚

学校の教師が連携して取り組むことで教育の効果が一層高まります。次のことに気をつけてチームワークづくりに努めましょう。

●組織としての成長

チームワークづくりで一番のポイントは、みんなで協力しみんなで成長するという考え方です。自分の役割を自覚し、しっかり役割を果たすことが大切です。組織の中の一人としての自分の存在をしっかりとらえることが必要です。

●自分の持ち味を生かす

教師には、それぞれ得意とする分野があります。個々の持ち味を生かすことで、より一層チームとしての力を発揮します。また、お互いの不足する部分をフォローし合うことも大切です。

●謙虚に成長を求める姿勢

周囲の教師からのアドバイスや援助は謙虚に受けとめ、自分の成長の糧としましょう。耳に痛い言葉ほど自分を成長させてくれます。

コラム

【「ホウ・レン・ソウ」マニュアル】

- ◇報告・連絡・相談で一番重視したいのは「相談」です。ただ現在の状況を伝えるだけでなく、次に何をすべきかまでしっかり話し合しましょう。
- ◇正確に！確実に！ 5W1Hを明確にして具体的に伝える。伝えたい内容を整理し過不足なく伝えるように心がけましょう。
- ◇タイミングよく！ 相手の状況（TPO）を考慮すること。緊急の事態でなければ、伝える内容にあった環境で話をするのが大切です。子どもたちのプライバシーに関わる話は特に気をつけてください。
- ◇効率的に報告・連絡するために。まず結果から先に伝えます。また、できるだけ早く伝えるように心がけましょう。内容は事実即して、自分の都合の悪い部分も包み隠さず伝えるようにしましょう。そして結果報告だけでなく、中間報告も忘れずに伝えましょう。

学校が組織として機能している姿は、子どもたちや保護者に対して安心感を与え、学校や教師に対する信頼感がアップします。チームワークを大切にしてお仕事に取り組みましょう。



2 保護者は子どもの成長と一緒に見守るパートナー

子どもの生活の場は学校だけではありません。家庭と学校が連携して子どもを育てていくことが重要です。子どもには、家庭生活での個人としての姿と、学校での集団の中での姿があります。その異なる姿を教師と保護者がお互いに理解していくことが大切です。共に子どもを育てるという姿勢を持ち、担任・学校からの情報発信を積極的に行うとともに、保護者の考えをしっかりと聴き、誠意をもった発言を心がけ、立場の違う教育観の相互理解を図り、連携を深めていかなければなりません。ただし、連携を深めると言っても慣れ合いや迎合は避けなければなりません。

(1) 積極的な情報発信で学校や担任の教育に対する理解を得る

保護者に対して、学校の教育目標や担任の「教育観」や「生徒指導観」をしっかりと説明し理解を得ることが重要です。多忙な中にも時間をみつけて、保護者への情報発信をルーティンワークに位置付ける必要があります。

●情報発信の機会を大切にす

保護者会や授業参観等、直接顔を合わせて話ができる機会は、特に大切にしたいものです。明快に手際よく情報を伝えるように十分に準備を整えてのぞまなければいけません。

また、学級通信を発行することは、保護者から理解を得る絶好の手段です。学級通信のポイント（下のコラム参照）に従い作成し、無理のないペースで定期的に継続して発行するようにします。

●日常的に保護者と連絡をとる

何かあれば迅速に連絡することはもとより、問題がある時だけでなく、子どもたちのよい言動などについて平素から積極的に情報発信することが大切です。このような時、電話は手軽な連絡手段ですが、込み入った内容などは、直接会って話をするように心がけます。

ちょっとした連絡には連絡帳はとても便利です。ただし、込み入った内容やプライバシーに関わることなどは、封書等を利用しましょう。

同じように、電話は非常に便利ですが、連絡事項の伝達にとどめます。子どもの問題行動や学校からの依頼や釈明・お詫び等は、直接顔を合わせて話すようにしましょう。



コラム

【学級通信のポイント】

- ◇誤字脱字・言葉の誤用・誤解を与える表現はかえって信頼を失うので注意する。
- ◇表題や構成を工夫してわかりやすい表現で読みやすくし、文章だけでなく写真やイラストを載せる。
- ◇公平公正。全ての子どもを紹介し、子どもにとってマイナスな表記はしない。
- ◇人権やプライバシーの保護に十分配慮する。
- ◇配付前に必ず管理職等のチェックを受ける。

【授業参観のポイント】

- ◇保護者が参観するのに適した授業を行う。
- ◇保護者あてに授業の解説を発行して授業内容への理解を図る。
- ◇保護者の意見や感想を集めて、授業改善に生かす。
- ◇欠席された保護者にも用意した資料を配付して理解を促す。

【保護者会のポイント】

- ◇構成的グループエンカウンター等を活用して和やかな雰囲気始める。
- ◇資料には、保護者のニーズに合わせた情報を掲載して家庭でも活用してもらう。
- ◇欠席された保護者にも用意した資料を配付して理解を促す。

※保護者宛て文書は、授業で使用するプリント等とは違い、外部へ発行する文書です。文書の作成に際し、著作権の侵害が無いように注意してください。

時間を惜しまず、ちょっとしたひと工夫で効果的に情報を発信するように心がけましょう。

保護者が学級の取組に関心を持てるよう、保護者の知りたい情報を提供して連携を深めていきましょう。



(2) 保護者の思いを上手に受信する

できるだけ早い時期に、全ての保護者と話をし、保護者の思いを受信することが大切です。

どの保護者も学校での自分の子どもの様子や学級の様子が気になっています。また、保護者は自分の子どもを伸ばしたいと思っており、子育てに関する情報などを求めています。そういった保護者のニーズをつかみ学級通信や保護者会等で扱っていくことが保護者との連携を深めます。

●保護者への対応は礼節をわきまえて

保護者と接するときは、常に感謝の気持ちと敬意を持ち、社会人としての礼節と言葉遣いを心がけることが大切です。コミュニケーションがよくとれていても、なれなれしい態度はとらないように気をつけなければなりません。

●保護者の思いを受けとめる第一歩は傾聴

保護者の話は、受容的・共感的な態度で否定せず、途中で口をはさまず最後まで聞くことが大切です。

常に穏やかな対応を心がけ、うなずき、繰り返しによる確認などを行い共感的な態度を示しながら話を聞くよう心がけます。

●PTA活動には積極的に参加する

PTA活動に参加している保護者は、積極的な学校への協力者です。教師もPTAの一員として可能な限り活動に参加するようにします。学校によく足を運んでいただける保護者だからこそ、学校の教育活動を真剣に考えており積極的な意見をいただくこともできます。また、学級担任の理解者にもなってくれますから、このような保護者と協力して学級保護者会などを活性化し、他の保護者にも働きかけながら連携を深めていきます。

●学校外にも積極的に足を運ぶ

地域のイベントや子どもたちのスポーツ大会、PTAバレーボール等には積極的に足を運ぶようにします。学校とは違った子どもたちの様子を知ることできますし、保護者とコミュニケーションを図ることで様々な情報を交換できます。また、親近感が増し連携が深まります。

(3) 保護者との連携における留意点

保護者とのやり取りで失礼がないように、常に相手を尊重する気持ちを忘れないようにします。

また、管理職等への「ホウ・レン・ソウ」を確実にに行いましょう。



●記録をとる

どんなことでも必ず記録を残すようにします。折角いただいた建設的な意見も忘れてしまったのでは、保護者の思いを受けとめたことになりません。また、相談事や苦情といった内容であれば、日時や場所、発言内容や行動等まで、できるだけ正確に記録しておきます。

●迅速かつ適切な対応を心がける

保護者の思いを受けとめたら、それを反映した行動をおこします。必要があれば管理職等とも相談し、学校として組織的な対応をとります。迅速かつ適切な対応をすることで、保護者からの信頼を得て連携がより一層深まります。

●事後報告までしっかり行う

保護者の思いに対して対応した後、事後報告まできちんと行い、連携を深めていきます。事後報告がなければ不信感につながるので注意します。

保護者の思いの深刻さを理解しない軽い受けとめは不信感につながります。

また、保護者の話の途中で口をはさむことや保護者の思いを理解しない不用意な発言は、絶対にしてはいけない対応です。まずは傾聴して、保護者の思いをしっかりと受けとめましょう。

最後まで話を聞き、適切な対応をとることで、保護者との連携は深まります。



VI 教師としての在り方

1 自分をコントロールする力を身に付けよう

(1) 忙しい教師の仕事

「学級づくりの大切さは分かっているが、忙しくてゆとりがない」と嘆かれる方もきっと多いことでしょう。忙しくなると子どもの傍にいられず、子どもの姿が見えなくなります。また、子どものちょっとした言動にイライラしてきて、子どもをやさしい目で見ることができなくなります。

確かに教師の仕事量は多く、忙しいことは否定できません。しかし、学級づくりの上手な教師の多くは、怒鳴ったり怒ったりせずに、いつも笑顔でいることが多いように思います。そして、仕事は速く、遅くまで学校にいることも少ないように思います。同じ学級づくりという仕事をしているのに、なぜこのような違いがみられるのでしょうか。

(2) 「時間のゆとり」と「心のゆとり」

一つは、学級づくりの上手な教師は、仕事の効率化が図れていると考えられます。後回しせずにその場で片づけたり、優先順位をつけたり、時間を決めたりして取り組んでいるので、仕事に無駄がありません。そこから時間のゆとりを生みだしているように思われます。

もう一つは、自分の心をコントロールできていると考えられます。しっかりした「教育観」を持って学級づくりに取り組んでいるため、指導にぶれがありません。また、子どもを見る目も確かなため、的を射た指導がなされています。これが心のゆとりを生みだしていると考えられます。

このように、自分の時間と心を管理する力を身に付けることが学級づくりを進める上では必要であると考えます。「自分を管理する能力」の育成に努めましょう。

(3) 「多忙感」から「満足感」へ

教育という仕事を「多忙（忙しくて疲れた）」と感じるか、それとも「満足（忙しかったが充実した）」と感じるのでは大きな違いがあります。

多忙感はマイナス志向で、「もうやりたくない」という気持ちが心を支配します。これに対して、満足感プラス志向で「またやりたい」という気持ちになります。

同じ仕事、同じ忙しさであれば満足感を感じた方が仕事は楽しいし、子どもの前では笑顔でいられるのではないのでしょうか。

「教育的愛情」や「教師の使命感」といった教師の「教育観」と日々の取組を結び付けてとらえると、取組自体に意義が見出せ、満足感を感じることができます。

子どものために汗をかくことを厭わず、子どもと一緒に活動することが楽しいと感じて取り組めば、疲れも心地よいものとなり、もっとよい学級をつくらうと、意欲も向上すると思います。



●心のコントロール

具体的に心をコントロールすることについて考えてみましょう。学級の中で問題が生じたり、面倒な仕事が増えてきたりした時に次のように考えると心にゆとりが生まれます。

謙虚に

① 「ありがたい」と思う気持ちを大切にしましょう。

- ・「忙しい」は「ありがたい」と考えましょう。自分が成長するチャンスです。
- ・愚痴や言い訳は言わないようにしましょう。聞く側にとってあまり心地よいものではありません。
- ・「忙しいのは自分だけじゃない」「もっと忙しい人もいる」と考えてみましょう。
- ・心がけたい言葉 <私にやらせてください。>
<ありがとうございます。精一杯やらせていただきます。>

誠実に

② 何事にも一生懸命に取り組みましょう。

- ・どんな仕事でも心をこめて行えば、楽しく充実したものとなります。
- ・余計なことは考えず、自分の仕事を一生懸命に行うだけです。よりよい仕事をめざしましょう。
- ・常に、自分自身をよりよくするために、学び続けましょう。

前向きに

③ 疲れた時は「何とかなるさ」という心のゆとりを持ちましょう。

- ・自分を追い込み過ぎないようにしましょう。
→ 自分を許せる人は、相手も許せるやさしい人です。
- ・焦らずに活動しましょう。場合によっては、80%の満足を心がけることも必要です。
→ 車で言う「ハンドルのあそび」が心のゆとりを生みだします。

④ 「必ずうまくいく」と自分自身に言い聞かせましょう。

- ・「自分是可以る。」と自分を信じましょう。
- ・困難は「あなたなら乗り越えられる、だから巡ってきた。」と考えましょう。

●時間のコントロール

次に、時間をコントロールし、仕事の効率化を図る具体例を考えてみましょう。

継続性

① わずかでもいいからやりましょう。

- ・わずかでも進めれば、目には見えなくとも、昨日よりは確実に進歩しています。
- ・毎日こつこつと積み重ねることで、いずれ花が咲き、実を結びます。
→ 仕事のルーティン化（当たり前のことを当たり前の時間に行う）を図りましょう。

行動化

② 考えてないで行動しましょう。

- ・頭の中であれこれ考えていても始まりません。迷った時はまず行動しましょう。
- ・困った時は、人に聞くのが一番手っ取り早い方法です。
- ・仕事に行き詰ったら、歩くなど気分転換することも必要です。

計画性

③ To Do リストを作りましょう。

- ・今日やるべき仕事を書き出し、終わったら二重線で消していきましょう。
→ 達成感、充実感が味わえ、やる気も出ます。
- ・仕事の優先順位を付けたり、やりやすい仕事から始めたりするなど、工夫しましょう。
- ・メモをとる習慣をつけましょう。忘れないためには付箋紙の活用も有効です。

④ ゆとりを持った計画を立てましょう

- ・仕事は、計画を立てても思い通りにいかないものです。目一杯の計画を立てず、ゆとりを持たせましょう。

迅速性

⑤ その場で片付けましょう。

- ・仕事を後回しにすると、「忘れる、なくす」という状況が起こります。
→ そして「思い出す、探す」という余計な労力を使うことになります。
- ・その場で解決できることは、できるだけその場で片付けるようにしましょう。

このように、自分の心と時間をコントロールして、ゆとりを生み出すことは学級づくりのみならず、教師としての仕事全般にわたり、よい結果を生み出すものと考えます。

その際、心がけたい教師の姿勢は、「謙虚さ」「誠実さ」「前向きさ」の3つです。自分の仕事を進める際、この3つの視点で客観的に自分を振り返るようにしましょう。

コラム

失敗したときは前向きに考えよう。「失敗はチャンス」です。

- ◇失敗は誰もがするもの、あなただけではありません。
- ◇失敗は過去のもの、考えても仕方がないものですから、「くよくよしない」「引きずらない」が大事です。
- ◇失敗した原因を分析・究明し、同じような失敗をしない手立てを考える、「反省」をしましょう。
- ◇きちんと反省できないと、また同じ失敗を繰り返します。
- ◇反省ではなく「後悔」していると、落ち込んで孤立し、問題を一人で抱え込むことになります。

2 教師の資質能力と学級づくり

(1) 教師の3つの資質能力

理想とする学級をつくるためには、教師の3つの資質能力を高める必要があります。一つは教育愛・使命感、等の「**教職に対する強い情熱**」、もう一つは児童理解・生徒指導実践力、等の「**教育の専門家としての確かな力量**」です。その2つの資質能力を高める上で欠かせないものが、もう一つの資質能力である「**総合的な人間力**」です。つまり、教師である前に魅力ある人間としての資質能力が必要であると考えます。

これらの資質能力を学級づくりの視点でとらえたのが資料2です。

資料2：学級づくりに必要な3つの資質能力

<教育の専門家としての確かな力量>

- 児童生徒を理解する力
 - ・一人一人の行動、健康、生活環境を把握し指導に生かす。
 - ・発達段階に応じた指導のあり方を理解している。
 - ・忙しくてもコミュニケーションを図る。
 - ・カウンセリングマインドを持ち、話をよく聞く。
 - ・公正公平な態度で児童に接する。
- 生徒指導を実践する力
 - ・適切なルールを設け、好ましい人間関係づくりに努める。
 - ・教育相談の手法を身につけ、適切な助言を行う。

<教職に対する強い情熱>

- 児童生徒への教育的愛情
 - ・頭ごなしに否定せず受け止める。
 - ・児童生徒の願いを理解し、労を惜しまず支援する。
- 教師としての使命感
 - ・児童生徒の自己実現を願い、日々教育活動に取り組む。
- 学び続ける向上心
 - ・目標とする先輩教師や理想の教師像に向けて研修に励む。
 - ・自分の指導を振り返り、日々指導力向上に努めている。

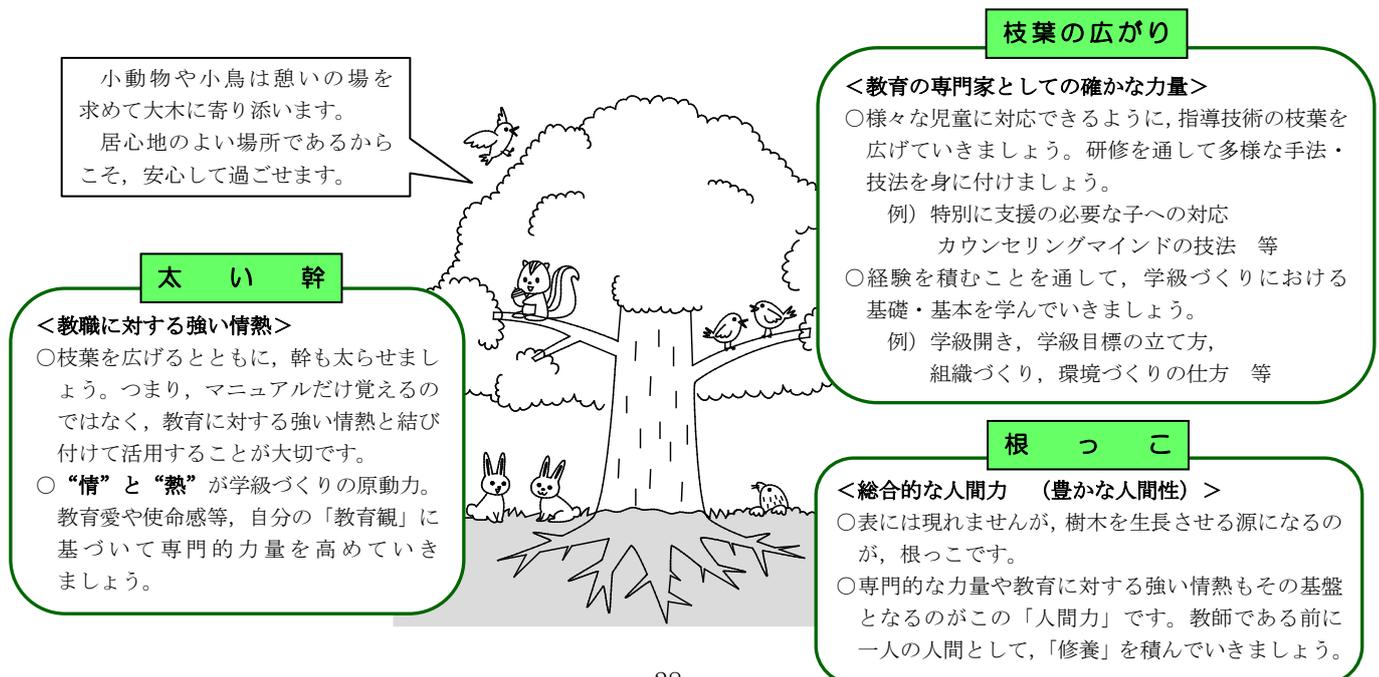
<総合的な人間力（豊かな人間性）>

- | | | |
|---------------|-------------------------|--|
| ○ 社会人としての識見 | ・言葉遣い、挨拶、電話の応対等 | → 「教師はその後ろ姿で教育する」 |
| ○ 対人関係能力 | ・誠実さ、真摯な態度、感謝の気持ち、謙虚な姿勢 | → 「教育することに対する畏敬の念を持つ」 |
| ○ 心の健康 | ・心のゆとり、車での「ハンドルのあそび」 | → 「必ずうまくいく」「なるようになる」「絶対あきらめない、でも欲張らない」 |
| ○ 協働・連携していく姿勢 | ・協調性、組織の一員、責任を一人で抱え込まない | → 「目配り、気配り、心配り」 |

この3つの資質能力は、相互に関連し合って継続的に高まっていくものです。つまり、年代や教職経験に関係なく、常に自分の実践及び自己の在り方を日常的に振り返り、チェックしながら向上していくものと考えます。

(2) 学び続ける教師をめざして

教師の3つの資質能力の関係を「樹木の図」に表すと、次のようになります。



樹木図の「枝葉の広がり」に当たるものが「教育の専門家としての確かな力量」です。学級づくりの基礎・基本や人間関係の築き方・児童理解の考え方等の手法を身に付けることが必要です。

また、「太い幹」に当たるものが「教職に対する強い情熱」です。理想とする学級をつくるためには、教師の資質能力の「教育的愛情」や「教師の使命感」など、「教育的情熱」は欠かせません。本書ではこれを「情」と「熱」に分け、学級づくりに欠かせない重要な資質能力ととらえています。

◇「情」とは「なさけ、やさしさ」

子ども理解を進めるための受容的態度、共感的理解の基盤となり、「子どもを包み込むやさしさ」

◇「熱」とは「熱い思い、バイタリティあふれる活動をすること」

例えば、子どものために汗をかくことを惜しまない、子どもに対して本気で立ち向かい、体当たりでぶつかる、といった教師の行動に表れる「子どもを思う強さ」

この「情と熱」が原動力となり、学級づくりは進められていくものと考えます。教師の「やさしさ」「強さ」は、教師のにじみ出る人間性や豊かな人間的魅力となって子どもを感化し、好ましい人間関係を築くことを可能にするものにとらえます。

さらに、樹木を生長させる源である「根っこ」に当たるものが「総合的な人間力」です。これは、教師に限らず、どんな職業でも必要とされる資質能力です。特に、教師は直接、子どもの教育にかかわり、教師の言動が子どもの今後の人生に影響を与えるものであるからこそ、この「人間力」を高めることは重要であると考えます。人として魅力があるからこそ、子どもは教師を信頼し、ついてきます。そして信頼関係があるからこそ、子どもは教師の言動に素直に耳を傾け、教師の一言が心に響くものとなります。そこで初めて「教育」は成り立つと考えます。

このように、教師の3つの資質能力をバランスよく向上させることが、子どもの自己実現を可能にし、それが理想とする学級の姿として表出されるのです。そのためには、常に学び続ける教師であることが重要であると考えます。

(3) 学級づくりを進めるための自己評価表

これら3つの教師の資質能力を学級づくりの視点で構造的にとらえ、自己評価表に表したものが、次頁に示した「『学級づくりに必要な教師の資質能力』チェック表」です。これは教師に必要な3つの資質能力について、学級づくりの視点から見直し、再構成したものです。よりよい学級づくりをめざして、この自己評価表を随時活用していただければ幸いです。

終わりに、「山本五十六」が残した言葉を紹介します。

やってみせ、言って聞かせ、させてみせ、ほめてやらねば 人は動かじ。
話し合い、耳を傾け、承認し、任せてやらねば、人は育たず。
やっている、姿を感謝で見守って、信頼せねば、人は実らず。

教育者の立場から「人を育てる」極意のようなものを端的に表現してあります。この言葉の中には「率先垂範」、「体験重視」、「傾聴」、「承認」、「信頼」、「感謝」…等、本書で取り上げた内容が網羅されています。「人を育てる」上で大切なことは、今も昔も同じなのかもしれません。

どうぞ、子どもを「尊重する」気持ちを大切にして、よい学級をつくってください。



【参考文献】

- 小学校学習指導要領 文部科学省 2008
中学校学習指導要領 文部科学省 2008
高等学校学習指導要領 文部科学省 2009
生徒指導提要 文部科学省 2010
「幼稚園、小学校、中学校、高等学校、盲学校、聾学校及び養護学校の教育課程の基準の改善について」(答申) 教育課程審議会 1998
「学級運営等の在り方についての調査研究」報告書 国立教育政策研究所生徒指導研究センター 2005
学級経営の充実に向けて 群馬県教育委員会 2010
学級経営の手引き よりよい人間関係を築く学級経営の充実を目指して 飛騨教育事務所教育支援課 2010
若い先生のための「学級経営講座」12 埼玉県教育局東部教育事務所 2012
学級経営を充実させるために 福岡市教育センター 2011
読本 達人に学ぶ学級経営力 千葉市教育センター 2012
豊かな人間関係づくり実践プログラム 千葉県教育委員会 2012
- カウンセリング感覚のある学級経営ハンドブック 有村久春 金子書房 2011
学級づくり成功の極意 赤坂真二 明治図書 2011
学級づくりのためのQ-U入門「楽しい学校生活を送るためのアンケート」活用ガイド 河村茂雄 図書文化 2009
学校現場で使えるカウンセリング・テクニク(上)ー育てるカウンセリング編・11の法則ー 諸富祥彦 誠信書房 2007
教師の仕事術ー多忙感をどう軽減するかー 高階玲治 教育新聞社 2011
決定版!教師のほめ方・しかり方 藤井啓之・志賀廣夫 学事出版 2009
高校教師入門 仕事の進め方・考え方 東海林明 学事出版 2011
子どものためのアサーショングループワーク 園田雅代・中釜洋子 (株)日本・精神技術研究所 2005
小学校版 新任教師のしごと 学級経営の基礎・基本 小学館 2007
授業がうまい教師のすごいコミュニケーション術 菊池省三 学陽書房 2012
シリーズ・学校で使えるカウンセリング② 学級経営と授業で使えるカウンセリング 諸富祥彦 ぎょうせい 2007
新版 小学校担任のちょっとした心配りと知恵 飯田稔 学陽書房 2005
スクールリーダーのためのコーチング入門 みんなのやる気を引き出す秘策 千々布敏弥 明治図書 2007
スペシャリスト直伝! 学級づくり成功の極意 赤坂真二 明治図書 2012
先生のためのアドラー心理学 勇気づけの学級づくり 赤坂真二 ほんの森出版 2010
中学校・高校版 新任・新人教師必携マニュアル 新任教師のしごと 小学館 2009
チョット先輩が教える“うまくいく”仕事のコツ 若い教師への元気になるアドバイス 諸富祥彦 教育開発研究所 2011
できる教師のココロの習慣 山中信之 学陽書房 2010
入門生徒指導「生徒指導提要」をふまえた新しい生徒指導のあり方 片山紀子 学事出版 2011
プロの教師が教える最高の学級づくり! 佐藤幸司 学陽書房 2012
プロの教師のすごい仕事&整理術 佐藤幸司 学陽書房 2011
やってみよう! コーチング 8つのスキルで子どもの意欲を引き出す 石川尚子 ほんの森出版 2009
若い教師に贈る失敗から学ぶ教師学 田沼雄一 学事出版 2008
- CS 研レポート 2005, Vol.55 啓林館 「子どもの規範意識」 国立教育政策研究所生活指導センター総括研究官 滝充
児童心理 2011.6月号 No.932 金子書房 「長所と短所をどうとらえるか ニュートラルな視点への挑戦」 伊藤(阿部)一美
児童心理 2012.1月号 No.943 金子書房 特集「規範感覚を育てる」
児童心理 2012.12月号 No.956 金子書房 特集「叱らない親・叱らない先生」
月刊生徒指導 2011.5月号 学事出版 特集「信頼を育てる学級づくり」
月刊生徒指導 2011.11月号 学事出版 特集「ゼロからの規範意識」
月刊生徒指導 2012.4月号 学事出版 特集「学級開き 新しい視点」
総合教育技術 2012.6月号 小学館 特集「叱って育てる」教育の復権

「学級づくりガイドブック ー好ましい人間関係を育む学級をめざしてー」

平成25年3月

発行：千葉県総合教育センター

〒261-0014 千葉市美浜区若葉2-13

TEL 043-276-1166 (代)

FAX 043-272-5128 (代)

ホームページアドレス <http://db.ice.or.jp/nc>

千葉県総合教育センター研究報告書 第401号

テーマ 好ましい人間関係を育む学級づくりの推進に関する研究
ー「学級づくりガイドブック」の作成をとおしてー

研究対象校 小・中・高等学校

研究領域 学級経営

学級づくりの基本的な考え方を「学級づくりガイドブック」にまとめました。相互尊重を基本として、教師と子どもたちとの信頼関係、及び子ども同士の間関係の築き方に視点を置いた学級づくりの考え方を示し、互いに尊重し合う学級づくりの在り方を究明します。



みんなで取り組む **千葉の教育**

千葉県総合教育センター

この冊子は、再生紙を使用しています。